

設置の趣旨等を記載した書類

獣医学部 設置の趣旨等を記載した書類 目 次

I. 設置の趣旨及び必要性	1
1. 国家戦略特別区域諮問会議における獣医学部設置計画について	
2. 岡山理科大学が担う必要性	
3. 獣医学部の養成する人材像と教育研究上の目的	
(1) 獣医学部の人材養成の理念と目的	
(2) 獣医学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針	
(3) 獣医保健看護学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針	
4. 獣医学部の中心的な学問分野とその研究対象	
II. 学部・学科の特色	7
1. 独自のアドバンスト科目の配置による特色ある教育	
(1) 獣医学科のアドバンスト科目	
(2) 獣医保健看護学科のアドバンスト科目	
2. 最先端の教育研究環境整備による教育研究の推進	
(1) 実験動物センター《a 動物からヒトへ》	
(2) 国際獣医教育研究センター《b ローカル対応及びグローバル対応》	
(3) 獣医学教育病院《c One Medicine》	
3. 多彩な専任教員の配置	
4. 特色ある英語教育	
III. 学部・学科等の名称及び学位の名称	13
IV. 教育課程の編成の考え方及び特色	14
1. 獣医学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由	
(1) 獣医学科のカリキュラムポリシー	
(2) 獣医学科の教育課程の科目構成とその理由	
(3) 獣医学科の科目区分内の科目構成とその理由	
2. 獣医保健看護学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由	
(1) 獣医保健看護学科のカリキュラムポリシー	
(2) 獣医保健看護学科の教育課程の科目構成とその理由	
(3) 獣医保健看護学科の科目区分内の科目構成とその理由	
3. コミュニケーション能力を養うための英語教育について	
(1) 特色①：達成水準を明確にしたステップアップ英語教育	
(2) 特色②：海外経験を有する教員を配置すること	
(3) 特色③：分野別に実施する実践的な英語の活用能力の醸成	
4. 教養教育科目について	
5. 準正課教育プログラムの設定	
V. 教員組織の編成の考え方及び特色	29
1. 教員組織編成の基本的な考え方	

2. 教員組織編制の考え方にに基づく教員配置	
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
(3) 獣医学教育病院	
3. 研究体制	
4. 教員の年齢構成	
5. 臨床系教員の年齢構成	
6. 助手の配置計画	
VI. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	35
1. 教育方法	
2. 履修支援の体制	
3. 履修指導	
4. 進級要件	
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
5. 卒業要件	
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
6. 学位論文の単位認定について	
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
7. CAP 制についての考え方	
VII. 施設、設備等の整備計画	45
1. 校地、運動場の整備計画	
(1) 校地の整備計画	
(2) 運動場及び体育館の整備計画	
(3) 学生の休息等空地の整備状況	
(4) 自治体との連携関係	
2. 校舎等施設の整備計画	
(1) 講座室（研究室）	
(2) オープンラボ	
(3) 実験動物センター	
(4) 顕微鏡室、作成室	
(5) 国際獣医教育研究センター	
(6) 実習室、大動物臨床実習室、解剖室	
(7) 獣医学教育病院棟	

(8) 講義室、演習室、コンピューター室	
(9) 3つの研究グループの施設設備	
3. 図書館等の資料及び図書館の整備計画	
(1) 図書館の整備計画	
(2) 図書資料等の整備計画	
(3) 情報施設等の機能	
(4) 他の図書館等との協力	
VIII. 入学者選抜の概要	54
1. 入学者受入れの方針（アドミッションポリシー）	
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
2. 選抜の方法	
3. 四国枠設定の根拠及び外国人留学生枠について	
4. 選抜体制	
IX. 取得可能な資格	59
(1) 獣医学科	
(2) 獣医保健看護学科	
X. 実習の具体的計画	60
1. 獣医学科	
(1) 獣医学科における学外体験学修	
(2) 獣医学科における総合参加型臨床実習	
(3) 獣医キャリアスキルアップ研修	
(4) 学内実習の具体的計画	
2. 獣医保健看護学科	
(1) 獣医保健看護学科における体験学修	
(2) 獣医保健看護学科における総合臨床実習	
X I. 企業実習（インターンシップ）を実施する場合の具体的計画	79
1. 企業実習（インターンシップ）の事前学修及び実習先確保の状況	
2. 実習先との連携体制	
3. 成績評価体制及び単位認定方法	
X II. 管理運営	80
1. 教授会	
2. 大学協議会	
3. 事務組織体制	
X III. 自己点検・評価	83
1. 本学の自己点検・評価と認証評価について	
2. 全学の内部質保証の実施方法と体制	

3.	第3期認証評価を受ける計画	
4.	獣医学部における内部質保証について	
5.	結果の活用・公表	
XIV.	情報の公表	85
1.	大学の教育研究上の目的に関すること	
2.	教育研究上の基本組織に関すること	
3.	教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること	
4.	入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること	
5.	授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること	
6.	学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること	
7.	校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること	
8.	授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること	
9.	大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること	
10.	その他(教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等)	
XV.	教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	87
1.	学生による授業評価アンケートの実施と活用	
2.	教員間の授業参観	
3.	FD講演会等の教員研修と情報の共有	
4.	今治キャンパスにおける取り組み	
5.	FDに関する大学間の取り組み	
6.	SD活動に関する取り組み	
XVI.	社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	90
1.	教育課程内の取組について	
2.	教育課程外の取組について	
3.	適切な体制の整備について	

設置の趣旨等を記載した書類

I. 設置の趣旨及び必要性

1. 国家戦略特別区域諮問会議における獣医学部設置計画について

平成 29(2017)年 1 月 20 日、国家戦略特別区域諮問会議において、獣医学部新設に係る認可の基準の特例が認定された。四国地区は獣医師養成系大学の空白地帯（資料 1）であり、産業動物臨床や公衆衛生分野の人材不足が深刻なため、平成 21(2009)年には四国知事会から緊急要望（資料 2）が出される等、四国地区での獣医師不足（資料 3）は切迫した状態であった。この状況の解消を含め、四国地区を中心とした西日本での獣医事に関連する危機管理の学術支援拠点等の必要性から、今治市は長年にわたり構造改革特別区域、国家戦略特別区域における獣医学部の設置を提案していた。今回の認定により、広域的に獣医師養成系大学の存在しない「四国」への獣医学部設置の必要性、また、先端ライフサイエンス研究や地域における感染症対策など、新たなニーズに対応する獣医師養成機関の設置の必要性が認められたこととなる。

学校法人加計学園は、平成 29(2017)年 1 月 4 日「文部科学省関係国家戦略特別区域法第二十六条に規定する政令等規制事業に係る告示の特例に関する措置を定める件の一部を改正する件」が公布されたことを受けて、平成 29(2017)年 1 月 10 日、国家戦略特別区域会議の構成員の公募に事業主体として応募した（資料 4）。その後、特定事業（獣医師の養成に係る大学設置事業）を行うと見込まれる者として広島県・今治市国家戦略特別区域会議の構成員に学校法人加計学園を加えることが決定され、1 月 20 日に国家戦略特別区域諮問会議（第 27 回）（資料 5）において獣医学部の新設に係る認可の基準の特例が正式に認定された。

2. 岡山理科大学が担う必要性

獣医学部の設置を計画している学校法人加計学園岡山理科大学（以下「本学」という。）は、開設当初より、充実した教員組織、教育研究環境を活かした学際的・応用的な教育研究と、社会の即戦力として活躍する実践力のある人材養成に取り組んできた。現在 6 学部（理学部、工学部、総合情報学部、生物地球学部、教育学部、経営学部）を有し、中四国最大規模の私立大学である。

本学は生物系分野において、昭和 63（1988）年理学部生物化学科の設置を皮切りに、理学部動物学科、生物地球学部を設置し、専門領域・学際領域の教育研究を行っている。また、医療系分野においても理学部応用物理学科、臨床生命科学科、工学部生命医療工学科を設置し、生命科学、医学、生物学を理解し、人類の健康と福祉に貢献する実践力のある人材を多数輩出している。

このような長年の実績を有し教育研究体制を確立してきた本学が、中四国、九州の地理上の中心に位置し、また、獣医養成伝統の地（約 130 年前に県立獣医系学校設置（資料 6））

である愛媛県今治市に、充実した施設設備環境、教員組織、独自の教育プログラムを整備し、国家戦略特別区域諮問会議で提示された「先端ライフサイエンス研究や地域における感染症対策など新たなニーズに対応する獣医学部を新設する」というミッションに応えるものである。

3. 獣医学部の養成する人材像と教育研究上の目的

(1) 獣医学部の人材養成の理念と目的

先端ライフサイエンス研究は、革新的な創薬、医療機器開発分野等へ貢献するものであり、ヒトの健康と福祉の増進や我が国の経済成長を支える極めて重要な分野である。基礎研究から応用研究へ、動物のデータからヒトのデータへ外挿する（動物からヒトへ）という研究プロセスにおいて、適切な動物実験を行い、動物種の特性をふまえ有効性とリスクを慎重に分析することができる人材、複雑な生命現象を統合的に把握する力を身につけている人材へのニーズは、高度化するライフサイエンス分野において、さらに高まっていくと考えられる。

また、社会のグローバル化の進展により、国境を越える人や物資の交流がますます盛んになり、家畜越境感染症・人獣共通感染症が世界的に拡大するリスクが高まっている。このため、動物の健康や食の安全の確保に留まらず、人の健康を保障するためにも国際的な防疫体制の強化は重要な課題となっている。

さらに、超高齢社会を迎え、生活習慣や加齢に伴う疾患への対応が喫緊の課題となっており、これらに貢献する予防医療や医薬品・医療技術の開発が期待されている。伴侶動物は、科学的にコントロールされている実験動物とは異なり、ヒトと同様な環境で生活し、かつ加齢性疾患等、ヒトに類似した疾病構造をとる。米国国立衛生研究所（NIH）では医学と獣医学は共通である（一つの医学：One Medicine）という認識に立ち、伴侶動物を用いたヒトの新しい予防医療や医療機器開発等の分野におけるイノベーション創出に着目し、積極的な人材養成に取り組んでいる。

これらの背景から、本学部は、動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療につなげることのできる人材、感染症統御などローカル対応及びグローバル対応のできる人材、及び医学と獣医学は共通であるという認識に立った動物とヒトの健康と福祉に貢献できる人材を養成する。以上の人材養成の理念に基づき、高度専門獣医師を養成する獣医学科を設置する。

また、ヒトの医療現場における医師と看護師との関係と同様に、獣医療現場においても、獣医師と動物看護師とが連携し、チーム獣医療体制を築くことが重要である。一方、近年獣医師の担う職域は拡大の一途をたどっている。

本学部においては、これらのニーズに対応して、ライフサイエンス研究分野において重要な実験動物の取扱や管理に従事できる技術者、人獣共通感染症の防御や産業動物の生産管理等、食の安全・安心に関し獣医師と協力して適確に対応できる技術者、獣医師と協働

して高度獣医療を支えることのできる動物看護師を養成する。本学部ではこのための多様な知識・技術に習熟する実験動物管理者、産業動物管理者、動物看護師等を獣医関連専門家（VPP）（資料7）と定義し、獣医保健看護学科を設置する。

1) 獣医学科の養成する人材像

獣医学科においては、獣医学の知識と技能を活かし、次の3つの観点に基づく人材像を掲げる。

ライフサイエンス研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。また、国内外の感染症防御や食の安全性を担うため、国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成する。さらに、ヒトと動物の疾病構造が類似していることに着目し、獣医師として動物の臨床的な知見に加え、ヒト疾患の特性を理解し、ヒトと動物の共通性を認識した上で、ヒト疾患に対する医療行為、臨床研究等に関する広い視野を有し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、動物とヒトの創薬や医療機器等の開発に貢献できる医獣連携獣医師を養成する。

本学部で養成するライフサイエンス分野と医獣連携獣医分野の人材像は、ともに動物からヒトをゴールとしたものであるため、一見似通っているが下記（表1）のように整理するとその違いが明確である。

（表1）ライフサイエンス分野と医獣連携獣医分野の人材像の違い

	ライフサイエンス分野	医獣連携獣医分野
1) 特徴	この分野は、獣医学の特徴である動物個体の特性を生かした基礎生命科学研究領域である。特にニーズの高いヒトの創薬研究においては、トランスレーショナル・リサーチ（遺伝子や細胞を用いた基礎研究の成果を、動物個体を用いて検証し、臨床研究に発展させる研究、すなわち基礎研究と臨床研究との間に実験動物など高等哺乳動物を用いる研究）を取り入れることにより、効率的な医薬品開発が期待されている。ヒトを含めた比較動物科学に基づく、ワクチン・診断薬・疾病予防・治療薬などの開発に寄与する研究分野である。	ヒトが超高齢社会に突入し、また伴侶動物の長寿化が進んだため、多くの生活習慣病、加齢性疾患や慢性感染症などがヒト医療と伴侶動物医療で共通した新しい問題となりつつある。One Medicineといわれるように、両者の疾患に対する予防・診断・治療などのツールやゴールは同一である。ヒトと共通の生活環境で過ごし、同様の疾病構造をもつ自然発症伴侶動物を用いて、医学部等と連携し、医薬品や新規医療技術開発の臨床評価研究を進める（疾病動物を用いた先行研究）。大学や研究機関、都市部を中心に増加する1.5次、2次病院等で推進する獣医療分野である。
2) 修得する知識・技能	コア・カリキュラム及びアドバンスト教育を受け、動物の形態・機能に習熟し、分子生物学やゲノム科学を理解し、実験動物の特性を生かし、医薬品等の有効性及び毒性評価を行うための知識・技能を修得する。	伴侶動物の疾病に関する基礎的な臨床知識・技術を身につけた上で、アドバンスト教育において、生活習慣病・加齢性疾患・慢性感染症等を対象に専門臨床獣医師になるための臨床研究の進め方を修得する。

3) 具体的な人材像	適切、適正な動物実験などを行うことができ、動物種の特性をふまえ創薬等の有用性とリスクを慎重に分析することができる人材。複雑な生命現象を動物個体レベルで統合的に把握する力を身につけ、ライフサイエンス分野の研究に貢献できる研究者。	動物との共生を考え、これを支える専門臨床獣医師。加齢性疾患等、ヒトに類似した疾病構造をとる伴侶動物を用いてヒトや動物の新しい予防医療や医療機器開発等の分野におけるイノベーション創出に貢献できる臨床獣医師。
4) 主な対象となる動物	マウス、ラット、ハムスター、モルモット、ウサギ、ブタ、サル類等の実験動物（遺伝子改変、疾患モデル動物を含む）	自然発症の疾患動物（伴侶動物）（イヌ、ネコなど選抜交配が原因となる動物の遺伝性疾患も対象となる）
5) 想定される進路・就職先	大学院進学（獣医及び他学部）。主としてヒト用製薬企業（薬理・薬効、安全性試験）、生物学的製剤（ワクチン開発、製造）、医療器材開発企業、動物用医薬品企業、動物実験受託研究機関、感染症等研究所（国立感染症研究所、国立医薬品食品衛生研究所、動物衛生研究所、畜産試験場など）、その他の研究機関（食品、化粧品等の研究所、動物用医薬品検査所、理化学研究所など）。	今後、さらに深刻となる高齢化に伴うヒトと伴侶動物の医療は目的・予防・治療も同じという One Medicine を基本に置き、動物ならびにヒト用の新しい医薬品や医療機器の臨床評価・臨床治験をベースに、将来 1.5 次あるいは 2 次病院の専門医として活躍する。大学院進学、医薬品・医療機器開発等のイノベーション企業、研究機関における動物実験施設等で動物実験に用いる疾病動物の獣医学的ケアを行う臨床獣医師等も含む。

2) 獣医保健看護学科の養成する人材像

獣医保健看護学科では、ライフサイエンス研究の発展や獣医事に関する感染症への迅速な対応、及び臨床獣医療におけるチーム獣医療遂行のため、次の3つの観点に基づく人材像を掲げる。

ライフサイエンス研究において、重要な役割を担う実験動物の取扱いや管理等の知識と技能を有し、動物の病態を理解し、ライフサイエンス研究の基盤を支える人材として、大学医学部等の附属実験動物センター、医科学研究機関、製薬企業、実験動物繁殖企業、医薬品、医療機器開発企業、衛生管理、機器関連企業、実験動物関連器材製造販売企業等で実験動物管理者等として実践的な能力を発揮する VPP を養成する。

次に、公共獣医事分野において、産業動物看護、感染症対策に関する知識と技能を有し、産業動物の管理を担うことで、食の安全・安心と感染症防御の基盤を支える人材を養成する。畜産の大規模集約化に伴う生産マネジメント、国境を超えた感染症、人獣共通感染症等のリスクマネジメント等、産業動物の生産管理、疾患管理、感染症対策に関する知識と技能を有し、食の安全、安心を支える人材として、VPP の需要はますます高まっている。

本学科では、これらの需要に対応し、公共獣医事分野において、家畜防疫、家畜改良センター、農林水産消費安全センター、厚生労働省食品衛生監視員等の公務員、さらに地方自治体における農産・畜産技術職等で専門知識と技能を活かし、危機対応も含め食の安心、

安全を支える人材や、地域のNOSAI（農業共済）、JA及び養豚、養鶏、酪農など畜産農家、食肉関連企業等で活躍するVPPを養成する。

さらに、獣医療看護分野において、獣医看護学に関する専門的な知識と技能を備え、高度化する臨床獣医療において獣医師と連携・補完し合うチーム獣医療を実践し、動物とヒトの健康と福祉、QOLの向上に貢献する人材を養成する。近年、急速に高度化する臨床獣医療において、獣医看護学に関する専門的な知識、技能を有し、獣医療の現場において予防・診断・治療をサポートできる実践能力の高い人材の需要は高まっている。

本学科では、これらの需要に対応し、動物病院や高度獣医療に携わる二次動物病院、ペット保険業、動物臨床検査業、ペット飼料企業、獣医関連出版業等において獣医看護に関する実践的な能力を発揮するVPPを養成する。

（2）獣医学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針

＜教育研究上の目的＞

獣医学科は、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野及び医獣連携獣医分野における教育研究を通して、動物とヒトの健康と福祉に貢献できる人材の養成を目的とする。

以上の教育研究上の目的をふまえ、獣医学科の学生が修得すべき能力及び卒業認定・学位授与の方針を次のとおり定める。

＜卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）＞

獣医学科では教育研究上の目的に定める人材を養成するために、次に挙げる能力を身につけ、所定の単位を修得した者に学士（獣医学）の学位を授与する。

- A 科学的根拠に基づき動物に関する高度な専門知識と技能を獲得し、専門分野で活躍・貢献できる能力を身につけている。
- B 獣医学の知識と技能を基盤として、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは医獣連携獣医分野への応用力を身につけている。
- C 獣医事に関する国際的な視野を有し、日本語及び外国語を用いてコミュニケーションをとることができる。
- D 獣医療に携わる者としての生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけている。

（3）獣医保健看護学科の教育研究上の目的及び卒業認定・学位授与の方針

＜教育研究上の目的＞

獣医保健看護学科は、動物の健康維持に必要な基礎的な獣医学知識、獣医看護学の専門知識と技能を持ち、獣医師とともに動物とヒトの健康と福祉、QOLの向上に貢献する人材の養成を目的とする。

以上の教育研究上の目的をふまえ、獣医保健看護学科の学生が修得すべき能力及び卒業認定・学位授与の方針は次のとおり定める。

<卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）>

獣医保健看護学科では教育研究上の目的に定める人材を養成するために、次に挙げる能力を身につけ、所定の単位を修得した者に学士（獣医保健看護学）の学位を授与する。

- A 科学的根拠に基づき動物に関する基礎知識と技能を修得し、専門分野で活躍・貢献できる能力を身につけている。
- B 基礎的な獣医学知識と獣医看護学に関する専門知識を基盤として、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは獣医療看護分野へ応用できる能力を身につけている。
- C 獣医療看護分野に必要なコミュニケーションをとることができる。
- D 獣医療に携わる者としての生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけている。

4. 獣医学部の中心的な学問分野とその研究対象

養成する人材像に対応するものとして、3つの中心的学問分野（ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野）を置く。その研究対象として、獣医学部では3つの研究グループを構成する。なお、獣医学科と獣医保健看護学科は、学科を越えて研究を推進する。

(1) ライフサイエンス研究グループ

神経・内分泌・代謝研究、創薬開発研究、組織再生医科学研究、実験動物管理研究等

(2) 公共獣医事研究グループ

感染症統御研究、畜水産等食品安全科学研究、国際獣医事危機管理研究等

(3) 医獣連携獣医研究グループ

加齢性疾患研究、癌・難治性疾患研究、再生医療・移植研究、診断技術・医療器材開発研究、高度看護技術研究等

なお、教育体制については、当該分野における教育の継続性を重視し、従来の講座制を維持する。一方、研究体制については講座制を廃し、研究の活性化を図るため、先進性を重視し柔軟で機動的な体制を導入する。具体的には、上記の研究グループを組織し、研究環境としてオープンラボを整備して目的別プロジェクト型研究を推進する。目的別プロジェクト型研究とは、獣医学、獣医療に関する現代的なニーズに基づく課題に対して、研究代表者が研究プロジェクトの目的や研究計画に沿って研究者を募り、応募した研究者の専門分野に基づき役割を明確にした上で、分野横断的な課題に時限的に取り組むものである。

II. 学部・学科の特色

養成する人材像をふまえて、獣医学部においては次の特色を掲げる。

《a 動物からヒトへ》

実験動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療につなげる教育研究を推進し、創薬研究等において国際競争力の向上に貢献する。

《b ローカル対応及びグローバル対応》

ゾーニングに基づく危機管理、感染症・食品安全に対応する国際獣医事等の公共獣医事に関する教育研究を推進する。

《c One Medicine》

医学と獣医学は共通である（一つの医学；One Medicine）という認識に立ち、医学部や薬学部、国の研究機関と連携し、新しい獣医臨床を実践し、動物とヒトの健康と福祉に貢献する。

これら3つの特色を実現するために、教育内容として独自のアドバンスト科目を置き、教育研究環境として実験動物センター、国際獣医教育研究センター、獣医学教育病院等、最先端の施設設備を整備する。さらに、これらの教育研究を推進するために、充実した教員組織を編成する。また、後述の3分野において外国語でコミュニケーションを図ることができるというディプロマポリシーを実現するため、特色ある英語教育を展開する。

1. 独自のアドバンスト科目の配置による特色ある教育

本学部においては、獣医学科及び獣医保健看護学科にアドバンスト科目を設ける。この科目群は各分野の専門性を確立するため、上記 a, b, c の特色をふまえ、3分野で構成している。アドバンスト科目の各分野への方向づけを行うために、1年次から実習や体験学習を継続して実施する。専門的な内容を英語で理解し発信することが重要であるため、英語圏にて研究・教育経験を持つ獣医学専任教員による英語環境での問題解決力強化を目指した教育を行う。

(1) 獣医学科のアドバンスト科目

1) ライフサイエンス分野 《a 動物からヒトへ》

ライフサイエンス分野において、基礎研究の成果をヒトの治療につなげ、創薬研究等において国際競争力の向上に貢献できる人材を養成するため、＜ライフサイエンス科目＞を配置する。この科目群では、創薬科学の専門家等を配置し、「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」等を体系的に学び、さらに実際にトランスレーショナル・リサーチの基礎的技能を修得する「ライフサイエンス特別実習」により、実験動物を用いた基礎研究の成果をヒトの治療に繋げる高度な実践力を有する人材育成を推進する。

2) 公共獣医事分野 《b ローカル対応及びグローバル対応》

公共獣医事分野において、国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成するため＜国際獣医事科目＞を置く。この科目群では、公衆衛生、獣医疫学、人獣共通感染症、水畜産の専門家等の専任教員を配置し、「動物危機管理学」、「国際動物疾病学」、「レギュラトリー科学」等を網羅したカリキュラムを整備する。さらに、これらの講義、演習で得られた知識を活用する実践的な能力を養うため、国際獣医教育研究センターを活用した「公共獣医事情報解析実習」を配置することにより、感染症統御に関する最新情報等を把握し、エビデンスの分析、評価を行う体験を通して、国内外の公共獣医事に対応できる獣医師を養成する。

3) 医獣連携獣医分野 《c One Medicine》

医獣連携獣医分野において養成する人材は、「医学と獣医学はひとつである (One Medicine)」という理念に基づき、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師である。このため、獣医師として動物の臨床的な知見に加え、ヒト疾患の特性を理解し、ヒトと動物の共通性を認識した上で、ヒト疾患に対する医療行為、臨床研究等に関する広い視野を備えておくことが重要である。

医獣連携獣医分野に対応するために設定した＜臨床獣医科目＞では、医学部や薬学部で教育経験を積んだ教員を配置し、「抗菌薬バイオロジー」、「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」等の体系的なカリキュラムにより、医学と獣医学は共通であるという認識にたった医獣連携ができる獣医師の教育研究を推進する。さらに、学生は「獣医キャリアスキルアップ研修」において、医学系（愛媛大学医学部）あるいは薬学系（千葉科学大学薬学部）の大学等教育研究機関において研修を受ける。これらの研修を通して、獣医学以外の分野の手法や考え方に触れることが出来るようになる。自身の専門分野がそこでどのような意味を持つのか、医学、薬学と獣医学の違い、異分野が連携した時の研究の広がりの可能性などを感じ取り、ひいては科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる能力も養える。One Medicine の概念を理解した学生は、生命システム全体を視野に入れた持続可能な社会づくりの意義を理解し、その実現に向け貢献できる人材となる。

このため、愛媛大学医学部、千葉科学大学薬学部との教育研究連携や国の研究機関での実習（資料8、資料20）などを通じて医獣連携の教育研究を推進する。具体的には、X. 実習の具体的な計画で記載する。

さらにこれらの機関との教育連携を活かして、研究者グループを形成し、共同研究、セミナー等研究会の開催により相互の理解を深め、ヒトや動物の医療に関する課題解決に取り組む医獣連携研究を推進する。獣医学が複雑な生命現象を総体的に把握、解明する分野であることを活かし、ライフサイエンス研究の場において、医学、薬学との連携・協働に

より、創薬、医療機器開発等、実際のヒトの疾病の治療に適用させる知識と技術を進展させる。

(2) 獣医保健看護学科のアドバンスト科目

1) ライフサイエンス分野

ライフサイエンス分野に対応するために設定した<実験動物科目>では、実験動物学の専門家等を配置し、「実験動物飼養管理学」、「遺伝子工学」、「実験動物看護実習」等を体系的に配置したカリキュラムにより、VPPとして適正な実験動物管理に関する教育研究を推進する。

2) 公共獣医事分野

公共獣医事分野に対応するために設定した<公衆衛生科目>では、産業動物獣医療の実務経験の豊富な教員を配置し、「産業動物看護学実習」、「バイオセーフティ学」、「動物危機管理学」等を網羅したカリキュラムにより、VPPとして産業動物の取り扱いや感染症防御の支援に関する教育研究を推進する。

3) 獣医療看護分野

獣医療看護分野に対応するために設定した<高度獣医療看護科目>では、臨床経験・動物看護教育経験を持った教員を配置し、「動物の疼痛と福祉」、「高齢動物看護学」等による体系的なカリキュラムにより、高度獣医看護に関する教育研究を推進する。

2. 最先端の教育研究環境整備による教育研究の推進

本学部において、上記で掲げたアドバンスト科目による特色ある教育を行うために、充実した教育研究環境を整備する。

(1) 実験動物センター《a 動物からヒトへ》

ライフサイエンス研究を充実させるために、「動物からヒトへ」というコンセプトのもと、実験動物センターを整備する。両学科において学科を越えてライフサイエンス分野の教育研究を実践する場とする。多機能の小動物飼育エリアと独立した中動物（サル、ブタ等）飼育エリア、さらに水産系飼育エリアを有する特色を持つ。中動物飼育エリアには、通常飼育室に加え、感染実験室、手術室等を備え、最先端のライフサイエンス研究ができる設備を備えている。

本センターは、開学4年後を目途に、AAALAC（国際実験動物ケア評価認証協会）の認証を得るための計画を進めている（資料9）。平成29(2017)年4月時点において、AAALAC認証を取得している獣医学部を擁する大学は北海道大学のみである。

(2) 国際獣医教育研究センター《b ローカル対応及びグローバル対応》

International Veterinary Education and Research Information Center (IVERIC)

本センターは、学外を対象に獣医事に関連する専門性の高い情報を収集、編集、発信することで、関連機関や他大学との教育研究等で連携するためのネットワーク構築を図るものである。また、学内では編集した情報を教育研究に活用し、新しい分野に対応できる専門獣医師及びVPPに必要な能力を養う。

学外に対しては、情報資源として多言語（日本語、英語、ベトナム語、マレーシア語、インドネシア語）による人獣共通感染症を含む約80種類の感染症に関する情報提供システムを確立する。この感染症情報を東南アジア諸国に提供し、情報交換することにより獣医学研究の質の向上を図る。また、本センターが国内外の獣医学領域に関する学会、研究会等をアレンジし、アジアを中心に獣医学教育研究のネットワークの構築を図る。

学内に対しては、グローバル対応に必要なライフサイエンス研究や公共獣医事教育研究を推進するため、専任教員により、関連する情報を編集し、本センターでデータベース化し、eラーニング等の教材やオンデマンドで提供する（資料10）。

海外獣医系大学との連携も視野に、本学園が締結している海外協定校のなかで、獣医学部を有している大学は『フィリピン国立大学ロスバニョス校』、『（ブラジル）パラナカトリカ大学』、『（ブラジル）パラナ連邦大学』の3大学である。本学が獣医学部の設置認可を受けた後、海外協定校の3大学と連携協議を進め、獣医学教育の交流を図る。

（3）獣医学教育病院《c One Medicine》

獣医学教育病院は、二次診療を行う教育病院であり、獣医学科及び獣医保健看護学科の学生は、実習、実践経験を積むことで、チーム獣医療を学ぶことができる施設となっている。また、獣医学教育病院は、One Medicineを実践し、動物の臨床をヒトの臨床に、ヒトの臨床を動物の臨床に活かす教育研究を推進する。

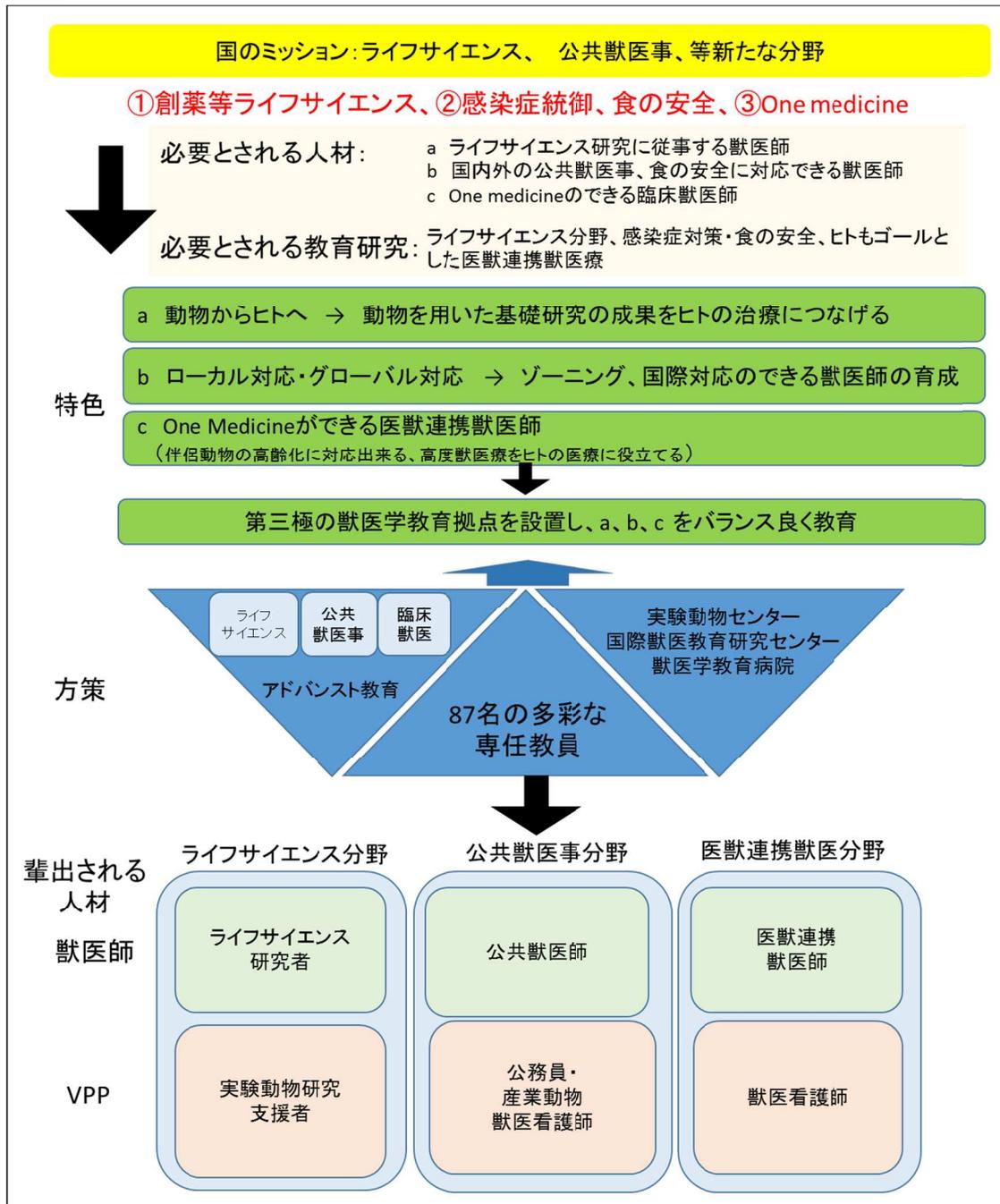
3. 多彩な専任教員の配置

本学部の教育においては、獣医学を始め、医学、薬学、農学、理学等の領域で活躍している教育研究者及び行政分野や獣医臨床分野で活躍している実務経験者による専任教員を配置し、充実した教育研究を行う。

また、国際対応のできる獣医師を養成するため、海外における教育研究の経験を有する教員配置を重視し、一定の期間、海外で生活し、研究・教育活動に従事したことがある経験を確認した結果、海外経験を有する教員を配置する（資料30）。

研究については、オープンラボの特徴を活かし、異なる領域の研究者間の交流を通じ活性化を図り、新たな発想を生み出す等、先進的な研究を行う。

(図1) 獣医学部の特色



4. 特色ある英語教育

「外国語を用いてコミュニケーションをとることができる」というディプロマポリシーを実現するため、本学部が養成する人材像に即し到達目標を次のとおりとする。

1) ライフサイエンス分野の到達目標

ライフサイエンス研究に必要な、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的英語力を獲得し、専門分野に関し英語で説明ができる。

2) 公共獣医事分野の到達目標

公共獣医事に関する専門用語を日本語、英語の両言語で理解し、国際獣医事情、法規等が理解・説明できる。

3) 医獣連携獣医分野の到達目標

獣医療コミュニケーションに必要な能力、例えば身体に関する英語表現、症状や痛みに関する英語表現、医療行為に関する英語表現等を身につけ、クライアントからの聞き取り、医療行為の説明、検査結果の説明、処方と管理等についての一般的な英語で説明できる。

このような人材を養成するため、本学部の英語教育の特色として、以下を挙げる。

- ① 達成水準を明確にしたステップアップ英語教育を実施し、そのための教育のPDCAサイクルを機能させていること
- ② 海外経験を有する教員を配置すること
- ③ 分野別に実践的な英語の活用能力を醸成する教育方法を確立すること

これらについては、IV. 教育課程の編成の考え方及び特色、V. 教員組織の編制の方針及びその特色、VI. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件において、後述する。

Ⅲ. 学部・学科等の名称及び学位の名称

本学部の名称は、「獣医学部（英語名称：Faculty of Veterinary Medicine）」とする。

学科の名称は、「獣医学科（英語名称：Department of Veterinary Medicine）」及び「獣医保健看護学科（英語名称：Department of Veterinary Associated Science）」とする。

獣医学科の学位の分野は「獣医学関係」であり、学科名称は、社会的、国際的な通用性がある「獣医学科（英語名称：Department of Veterinary Medicine）」とした。

獣医保健看護学科の学位の分野は「農学関係」であり、獣医学科に併設し、獣医関連専門家（VPP）を養成することから、学科名称は「獣医保健看護学科」とした。英語名称は、VPPの職域を科学する学問として捉え、「Department of Veterinary Associated Science」とした。

学位については、獣医学科は「学士（獣医学）（英語名称：Bachelor of Veterinary Medicine）」、獣医保健看護学科は「学士（獣医保健看護学）（英語名称：Bachelor of Veterinary Associated Science）」とする。

（表 2）学部・学科等の名称及び学位の名称

学部名	獣医学部	Faculty of Veterinary Medicine
学科名	獣医学科	Department of Veterinary Medicine
	獣医保健看護学科	Department of Veterinary Associated Science
学位名	学士（獣医学）	Bachelor of Veterinary Medicine
	学士（獣医保健看護学）	Bachelor of Veterinary Associated Science

IV. 教育課程の編成の考え方及び特色

本学部の教育研究上の目的、ディプロマポリシーに基づき、教育課程は次の方針で編成する。

1. 獣医学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由

獣医学科の教育課程の編成方針（カリキュラムポリシー）を（1）に掲げ、続いて（2）に科目群の構成及びその理由を、（3）に科目群内の科目構成とその理由を述べ、教育課程編成の体系性について説明する。

（1）獣医学科のカリキュラムポリシー

- A 大学における学びへの適応を図り、獣医学への興味を持たせ、初年次よりライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野の特性を理解させるために学部共通導入科目、基礎科目を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- B 獣医師として必要な知識と技術を修得する基本的な授業科目として獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを体系的に配置する。教育にあたっては講義、演習と実習の連携を密にし、実用的な知識と技術を身に付けることができるよう配慮する。
- C 獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを基盤として、新たな課題に対応する能力を養うため、アドバンスト科目に獣医キャリアスキルアップ研修、及びライフサイエンス分野（ライフサイエンス科目）、公共獣医事分野（国際獣医事科目）、医獣連携獣医分野（臨床獣医科目）を配置する。教育にあたっては、英語を用いた授業を導入する。また、アクティブ・ラーニング等の方法を適切に取り入れ、課題解決能力を身につけさせる。
- D 学生自らが課題を探求し、解決する姿勢や、その過程と結果を論理的に説明する能力等、獣医師としての資質を涵養するため、卒業論文を総合科目として配置する。
- E 社会人としての基盤を築き、総合的な判断力を身に付けることのできる教養教育科目を配置する。教育にあたっては、講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- F 国際的な視野を涵養し、基礎的なコミュニケーションに必要な英語を中心とした外国語を継続的に学修するため外国語教育科目を配置する。教育にあたっては、学生の能力に配慮した効果的な指導を行う。

（2）獣医学科の教育課程の科目構成とその理由

獣医学科は、「専門教育科目」のうち、主に4年間は獣医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下「コア・カリキュラム」という。）により、獣医師としての基本的な知識と技術を学修する科目群として<①学部共通導入科目><②基礎科目>を配置する。コア・カリキュラムが中心となる専門教育科目として<③基礎獣医系科目><④応用生物系科目>

><⑤公衆衛生系科目><⑥畜水産系科目><⑦臨床系科目>を配置する。なお、1年次からの体験学習と実習を通じて、将来への方向づけを行う。4年次から講座に配属させ、専門職域に関連する知識と技術のステップアップを図る。5年次では、<⑧アドバンスト科目>の獣医キャリアスキルアップ研修において各職域の現場の体験を積む。3つのアドバンスト分野<⑧-A ライフサイエンス科目><⑧-B 国際獣医事科目><⑧-C 臨床獣医科目>を設ける。さらに、5年次、6年次には、<⑨総合科目>として卒業論文を配置する。以上の科目群により、ライフサイエンス研究分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野における専門的な能力を備えた人材を養成する。

学部段階における幅広い教養を修得させ、より高次の専門性ならびに豊かな人間性の基盤を形成するために、「専門教育科目」の他に、「外国語教育科目」「教養教育科目」を配置する。

国際対応のできる語学の資質を養うため、「外国語教育科目」では、ステップアップ教育として1～2年次においては一般的な英語によるコミュニケーション及び文章読解のスキルを教育し、3年次対象の「専門英語」では、英語圏で教育研究経験を持つ獣医学の専任教員が指導を担当する。4年次からは講座に配属させ、プレゼミナールで英語の専門書や原著論文の輪読を開始し、その後3年間、英語文献及び英語表現に慣れる機会を設ける。

さらに、<⑧アドバンスト科目>では、英語を交えた講義を実施し、全体として約2割を英語で指導し、専門分野での英語力を強化する。

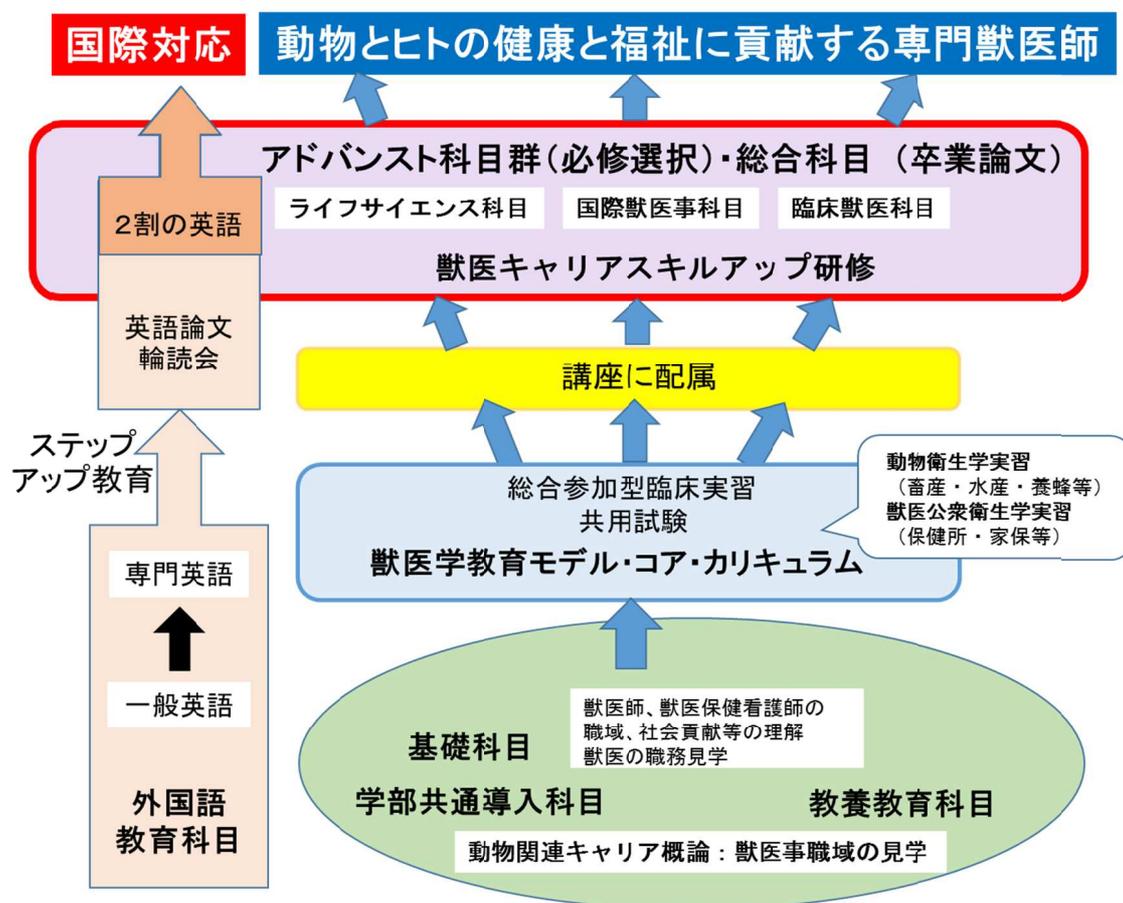
(表3) 獣医学科 科目区分表

科目区分	
専門教育科目	①学部共通導入科目**
	②基礎科目**
	③基礎獣医系科目*
	④応用生物系科目**
	⑤公衆衛生系科目*
	⑥畜水産系科目**
	⑦臨床系科目**
	⑧アドバンスト科目
	獣医キャリアスキルアップ研修
	A ライフサイエンス科目
	B 国際獣医事科目
C 臨床獣医科目	
⑨総合科目	
外国語教育科目	
教養教育科目	初年次教育科目
	人間・社会科学教育科目
	キャリア教育科目
	科学技術教育科目

**一部を除きコア・カリキュラムで構成

*すべて獣医学教育モデル・コア・カリキュラムで構成

(図2) 獣医学科教育課程の編成 模式図



(3) 獣医学科の科目区分内の科目構成とその理由

獣医学科の「専門教育科目」は、1年次から4年次にコア・カリキュラムを中心とした科目群を(表3)の①～⑦で行い、共用試験(Vet-CBT、Vet-OSCE)終了後、5年次から6年次で、本学の特色である<アドバンスト科目>を⑧、<総合科目(卒業論文)>を⑨に配置している。

「専門教育科目」のコア・カリキュラムに関する科目群(①から⑦)については、平成23(2011)年に策定された新しいコア・カリキュラム(51講義、19実習)に対応する科目として講義53科目、実習24科目を配置し、コア・カリキュラムの全体目標、一般目標、到達目標をふまえ、獣医師として必要な知識と技術の修得を行うことを目的としている。(資料34 コア・カリキュラムとの対応表) 7科目群は、コア・カリキュラムの導入教育・基礎獣医学教育分野に対応する<①学部共通導入科目>、<②基礎科目>、<③基礎獣医系科目>、コア・カリキュラムの病態獣医学教育分野に対応し、獣医療に関する基盤技術や獣医科学を学ぶ<④応用生物系科目>、コア・カリキュラムの応用獣医学教育分野に相当し、獣医公衆衛生分野を学ぶ<⑤公衆衛生系科目>、獣医師の職域を展望しコア・カリキュラムと関連して学ぶべき本学独自の内容として設定した<⑥畜水産系科目>、コア・カ

リキュラムの臨床獣医学教育分野に対応した<⑦臨床系科目>を配置する。コア・カリキュラムに対応する授業科目は、すべて必修である。

なお、<①学部共通導入科目>は、獣医保健看護学科と共に学ぶことで、互いの立場の理解を深め、獣医師がVPPと協働する必要性を認識する科目群であり、「人間・動物関係学」を除き、必修としている。また、生命倫理、科学倫理、動物福祉に基づいた行動規範を身につけた人材を養成するため、<学部共通導入科目>に「生命倫理学」1単位（1年②期）、<基礎科目>に「動物福祉論」1単位（1年①期）、さらに5年次以降の卒業論文作成に備え、「科学倫理学」1単位（4年①期）を配置し、全て必修としている。また、特に、科学倫理については、「フレッシュマンセミナー」において、第6回の講義で初期の心構えを学習する。フレッシュマンセミナー、動物福祉論、生命倫理、科学倫理で学習した内容をふまえ、「獣医キャリアスキルアップ研修」における実習前に、獣医倫理について再度学修する（資料31）。

コア・カリキュラムに含まれない科目は、本学科の特色的な科目であり、<④応用生物系科目>の「獣医免疫学実習」は生体防御の実践的な理解に必須であることから必修科目とした。また、愛媛県は我が国有数の漁業県であり、学生には講義だけではなく実習として魚に触れておくことは重要であると考え、「魚病学実習」も必修科目とした。<⑥畜水産系科目>には、「水産増養殖学」及び農場等生産現場を理解するための「生産農学概論」、繁殖・肥育のための「飼料作物学」を配置している。

4年次秋学期に共用試験（Vet-CBT、Vet-OSCE）に備えて「総合獣医学演習Ⅰ」を配置しOSCEの医療面接を想定した実習を行う。その後、総合参加型臨床実習を経て、アドバンスト科目に進む。なお、これまでの学習の総括と獣医師国家試験に備えることを目的とした「総合獣医学演習Ⅱ」を6年③期に配置して、卒業後、獣医師として活躍するための教育課程としている。

<⑧アドバンスト科目>は、「獣医キャリアスキルアップ研修」と3つの科目群<⑧-A ライフサイエンス科目>、<⑧-B 国際獣医事科目>、<⑧-C 臨床獣医科目>を設定し、各分野に分かれて人材を養成する。「獣医キャリアスキルアップ研修」は、実践的な場での体験を行い、卒業後の進路など将来設計に役立てる必修科目である。

ライフサイエンス分野においては、研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。このため、<⑧-A ライフサイエンス科目>には医療分野全般にわたる国際標準の研究開発のプロセス、ハイスループットスクリーニング等の最新創薬技術、有効性・安全性・品質に関わる諸規制について学ぶ「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」、「国際ライフサイエンス産業政策論」、「ライフサイエンス特別実習」等、9科目の選択科目を置き、ライフサイエンス分野での実践的な知識を修得する。ライフサイエンス分野を選択した場合には<⑧-A ライフサイエンス科目>より10単位を必修とし、残りの3単位に関しては、<国際獣医事科目><臨床獣医科目>から修得する。

公共獣医事分野においては、国内外の感染症防御や食の安全性を担うための国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成することを目的としている。このため、＜⑧-B 国際獣医事科目＞には現場で発生した課題に対して自ら考え、検証し解決にあたることのできる実践的な能力を養うことを重視し、「国際獣医事概論」、「国際動物関連法規」、「セキュリティ学」、「グローバル食品管理科学」、「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」等、15科目の選択科目を置く。また、教育方法としてPBLを取り入れ、学生の実践的な能力を養う。公共獣医事分野を選択した場合には、＜⑧-B 国際獣医事科目＞から「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」を含む9単位を選択必修とし、残りの4単位に関しては、同科目群あるいは＜ライフサイエンス科目＞＜臨床獣医科目＞から修得する。

医獣連携獣医分野においては、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師養成する。このため、＜⑧-C 臨床獣医科目＞は、獣医学で得られた基礎的な研究成果をヒト臨床分野に繋いでいく方法論、新しい医療技術・治療薬・診断薬の開発に活かす手法等を学ぶ「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」、「抗菌薬バイオロジー」、「免疫関連疾病学」、「総合臨床検査特別実習」等、10科目の選択科目を配置する。医獣連携獣医分野においては、臨床研究を基盤にして基礎研究に関する知識を養うことから、＜⑧-C 臨床獣医科目＞から9単位を選択必修とし、＜ライフサイエンス科目＞から「トランスレーショナル・リサーチ」、「分子細胞腫瘍学」、「創薬科学」の3科目3単位を必修とする。残りの1単位については、分野を問わず選択する。

＜⑨総合科目＞には、「卒業論文Ⅰ」、「卒業論文Ⅱ」、「卒業論文Ⅲ」の3科目を必修科目として配置する。本科目群は5～6年次に配置している。なお、医獣連携獣医分野では、「トランスレーショナル・リサーチ」（5年③期）を履修し一般概念を身に付けた後、より臨床学に特化した「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」（5年④期）を学ぶことになる。

以上、①から⑨の科目によって、3つの分野の専門獣医師としての知識と技能を修得させ、創薬等、先端ライフサイエンス分野へ貢献する獣医師、人獣共通感染症統御、食の安全等に対応できる獣医師、あるいはOne Medicine(医学と獣医学は共通である)の概念を認識し実践できる医獣連携獣医師等、獣医師が取り組むべき新たな分野に対応できる科目構成としている。なお、「専門教育科目」の履修順序については、カリキュラムツリーに示した（資料11-P1）。

2. 獣医保健看護学科の教育課程の編成方針、科目区分内の科目構成とその理由

獣医保健看護学科の教育課程の編成方針（カリキュラムポリシー）を（1）に掲げ、続いて（2）に科目群の構成及びその理由を、（3）に科目群内の科目構成とその理由を述べ、教育課程編成の体系性について説明する。

（1）獣医保健看護学科のカリキュラムポリシー

- A 大学における学びへの適応を図り、獣医看護学への興味を持たせ初年次よりライフサイエンス分野、公共獣医事分野、獣医療看護分野の特性を理解させるために学部共通導入科目、基礎科目を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- B 獣医関連専門家（VPP）として必要な知識と技術を修得する獣医看護学等を基本授業科目として体系的に配置する。教育にあたっては講義、演習、実習の連携を密にし、実用的な技術を身に付けることができるよう配慮する。
- C 獣医看護学を基盤として、新たな課題に対応する能力を養うため、獣医看護アドバンスト科目に、獣医看護実務実習、及びライフサイエンス分野（実験動物科目）、公共獣医事分野（公衆衛生科目）、獣医療看護分野（高度獣医療看護科目）を配置する。教育にあたっては講義、演習、及び実習を適切に取り入れ、知識と理解の定着を図る。
- D 学生自らが課題を探求し、解決する姿勢や、その過程と結果を論理的に説明する能力等、VPPとしての資質を涵養するため、総合科目を配置する。
- E 社会人としての基盤を築き、総合的な判断力を身に付けることのできる教養教育科目を配置する。教育にあたっては、講義、演習、及び実習を適切に組み合わせ、自発的学習を促すべく工夫を行う。
- F 国際的な視野を涵養し、基礎的なコミュニケーションに必要な英語を中心とした外国語を継続的に学修するため外国語教育科目を配置する。教育にあたっては、学生の能力に配慮した効果的な指導を行う。

（2）獣医保健看護学科の教育課程の科目構成とその理由

獣医保健看護学科では、1年次からの体験学習と実習を通じて、将来への方向づけを行う。3年次から講座に配属させ、専門職域に関連する知識と技術のステップアップを図る。なお、動物看護師統一認定機構が推奨する動物看護師養成モデルコアカリキュラムにも準拠した教育課程を整備し（資料41）、獣医療に携わる者としての水準をクリアした上で、さらに本学科独自の特色ある教育課程により、VPPとして実践的な能力を養う。

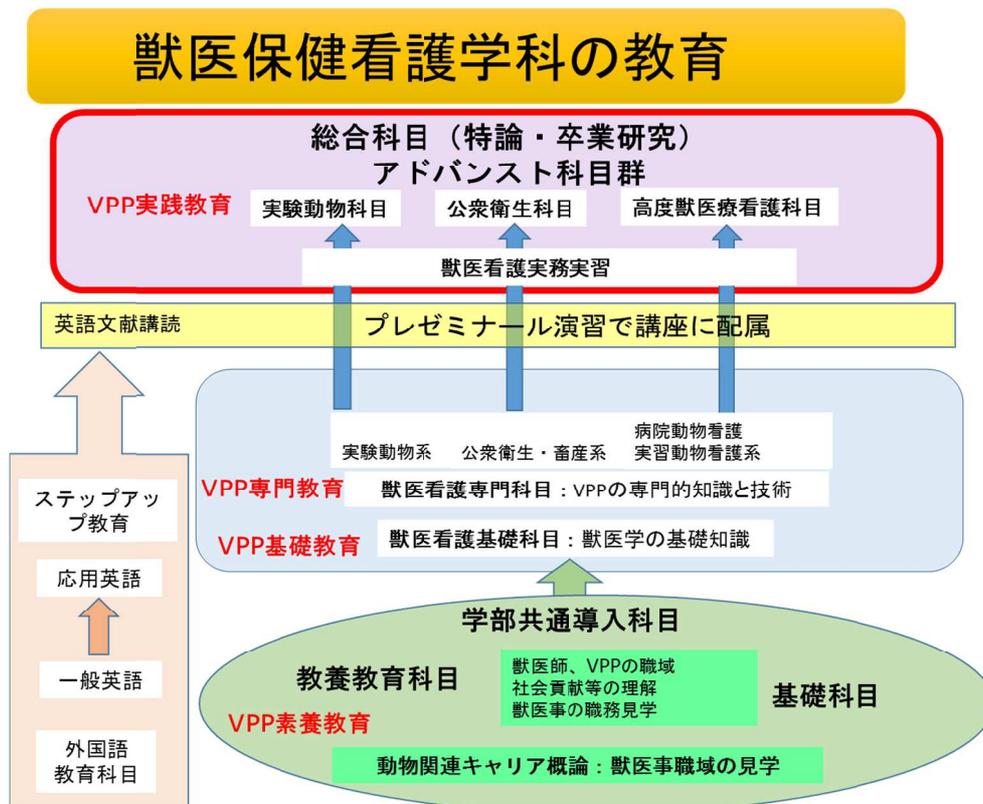
獣医保健看護学科の「専門教育科目」は、獣医学科と共通した＜①学部共通導入科目＞と＜②基礎科目＞を配置する。獣医学の基礎と獣医看護学の専門知識と技術を学ぶために、＜③獣医看護基礎科目＞、＜④獣医看護専門科目＞を配置している。＜⑤獣医看護アドバンスト科目＞には3つの分野＜⑤-A 実験動物科目＞＜⑤-B 公衆衛生科目＞＜⑤-C 高度

獣医療看護科目>と獣医看護実務実習を配置する。<⑥総合科目>には、卒業研究に繋げるプレゼミナールとして「プレゼミナールⅠ～Ⅳ」を配置し、さらにVPPが担う多様な分野への就業力を養成するため各分野の特論を配置する。最終的に4年間の学修の総括として卒業論文を作成する卒業研究Ⅰ・Ⅱを配置し、ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、あるいは獣医療看護分野へ応用できる能力を身につけたVPPを養成する。

(表4) 獣医保健看護学科 科目区分表

科目区分		
専門教育科目	①学部共通導入科目	
	②基礎科目	
	③獣医看護基礎科目	
	④獣医看護専門科目	
	⑤獣医看護アドバンスト科目	⑤-A 実験動物科目
		⑤-B 公衆衛生科目
		⑤-C 高度獣医療看護科目
		獣医看護実務実習
⑥総合科目	プレゼミナール	
	特論	
	卒業研究	
外国語教育科目		
教養教育科目	初年次教育科目	
	人間・社会科学教育科目	
	キャリア教育科目	
	科学技術教育科目	

(図3) 獣医保健看護学科教育課程の編成 模式図



(3) 獣医保健看護学科の科目区分内の科目構成とその理由

本学科の「専門教育科目」の科目群の科目構成とその理由について、以下に述べる。

<①学部共通導入科目>は、獣医師と協働するVPPとして意識づけるために、獣医学科と共通した科目として4科目配置し、このうち、「動物関連キャリア概論」、「生命倫理学」、「獣医事法規」はコア・カリキュラムに対応する科目であり、必修科目である。

<②基礎科目>では、獣医学の基礎を学ぶために、獣医学科との共通科目として7科目を配置し、このうちコア・カリキュラムと対応した「動物分子生物学」を含め、3科目を必修とする。

<③獣医看護基礎科目>は基礎獣医学と獣医看護の基盤となる科目として28科目を配置し、このうち「動物福祉論」等18科目がコア・カリキュラムと対応し、「動物福祉論」、「生命関連法規」、「動物生理学」、「動物形態機能学Ⅰ」、「動物形態機能学Ⅱ」、「栄養学」の6科目を必修科目とする。

<④獣医看護専門科目>は、獣医看護学の専門知識と技術を学ぶ科目として25科目を配置し、そのうち23科目がコア・カリキュラムに対応しており、「動物看護学概論」等15科目を必修科目とする。

<⑤獣医看護アドバンスト科目>では、獣医師とチームを組み協働するVPPを養成するために、<⑤-A 実験動物科目><⑤-B 公衆衛生科目><⑤-C 高度獣医療看護科目>を配置する。

＜⑤-A 実験動物科目＞では、ライフサイエンス分野に対応する VPP を養成するために、「実験動物飼養管理学」「実験動物看護実習」など実践力を養う 6 科目と、学部共通科目として「トランスレーショナル・リサーチ」など 2 科目、計 8 科目を配置し、実験動物の管理等実践的な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には＜⑤-A 実験動物科目＞から 3 単位を選択必修とし、残りの 2 単位に関しては、同科目群あるいは＜⑤-B 公衆衛生科目＞、＜⑤-C 高度獣医療看護科目＞から修得する。

＜⑤-B 公衆衛生科目＞では、公共獣医事分野に対応する VPP を養成するために、「産業動物看護学実習」、「人工授精学」など 8 科目と、学部共通科目として「レギュラトリー科学」、「医薬品・食品安全性評価演習」等 3 科目、計 11 科目を配置し、感染症防御、食の安全及び産業動物看護に必要な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には＜⑤-B 公衆衛生科目＞から 3 単位を選択必修とし、残りの 2 単位に関しては、同科目群あるいは＜⑤-A 実験動物科目＞、＜⑤-C 高度獣医療看護科目＞から修得する。

＜⑤-C 高度獣医療看護科目＞では、動物とヒトの健康と福祉を獣医師と共に考え、動物とヒトの QOL 向上を実践する VPP を養成するために、「高齢動物看護学」、「動物の疼痛と福祉」、「救急・終末医療看護学」等 5 科目と、学部共通科目として「チーム獣医療学」を加えた計 6 科目を配置し、伴侶動物獣医療における獣医看護に必要な知識と技能を修得する。この分野を選択した場合には＜⑤-C 高度獣医療看護科目＞から 3 単位を選択必修とし、残りの 2 単位に関しては、同科目群あるいは＜⑤-A 実験動物科目＞、＜⑤-B 公衆衛生科目＞から修得する。

獣医看護実務実習では、コア・カリキュラムと対応し、学外の動物診療機関、動物園、研究機関、実験動物施設、畜産系公的機関（動物検疫所、家畜改良センター等）等で実習を行い、実践的な知識と技能を修得する。

＜⑥総合科目＞では、プレゼミナール I-IV、卒業研究 I-II を配置し、各分野における VPP としての専門的な資質を養う。また、特に VPP の担う多様な職域における実践的な能力を高め、同時に卒業研究における課題を設定し、自ら探究する活動を通して知識を深める各分野の特論科目として「動物とヒトの健康と福祉特論」、「産業動物特論」、「実験動物福祉特論」、「VPP 特論」を開講する。

以上、①から⑥の科目群を学修することにより、動物とヒトの健康と福祉に貢献する VPP を養成する科目構成としている。なお、「専門教育科目」の履修順序については、カリキュラムツリーに示した（資料 11-P2）。

3. コミュニケーション能力を養うための英語教育について

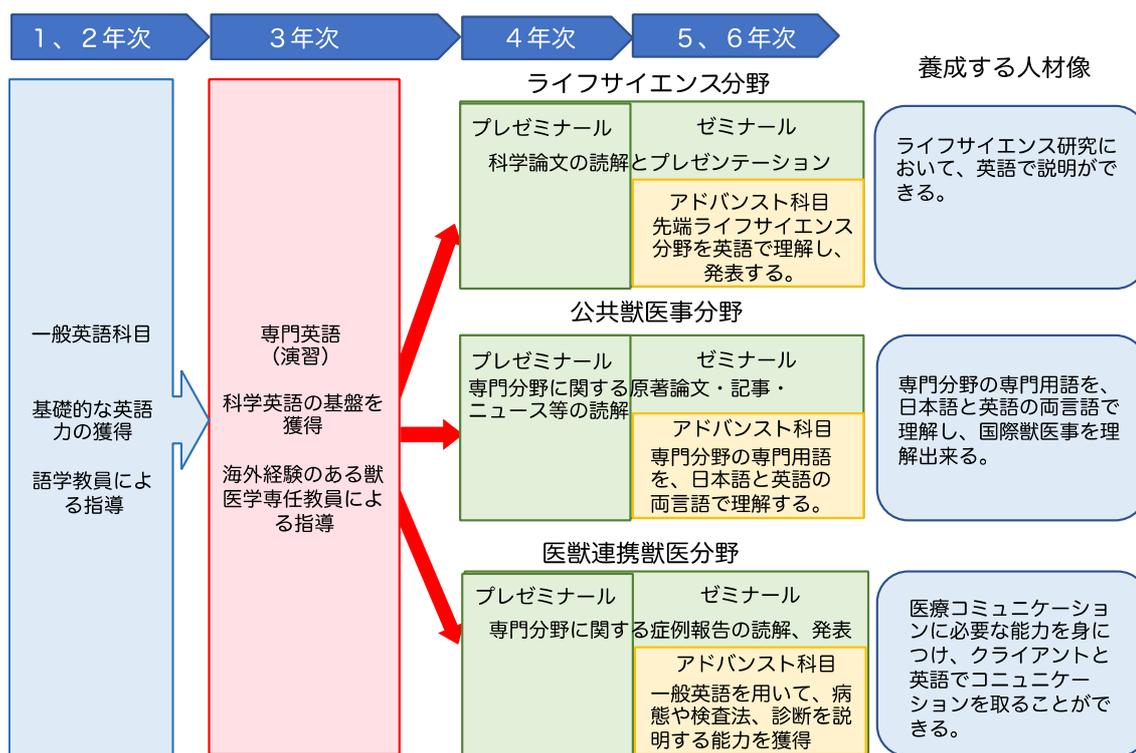
（1）特色 ①：達成水準を明確にしたステップアップ英語教育

獣医学部獣医学科のカリキュラムは、英語を用いたコミュニケーション能力を有する学生を育てることを目標として、従来型の英語専門用語の語彙量を増やし読解力を強化することに加えて、英語で与えられた情報を的確に理解し問題の本質を見極め、自己の意見を

もとに建設的に議論する能力を育てることを考慮している。そのため、英語のステップアップ教育を通して基本的な語彙力、英語読解力の向上を助けることに加え、表現力や議論力を取得するように科目配置している。

各ステップにおいては、到達目標及びその達成水準を明確に示した上で、授業科目を配置する。学生の達成状況は随時確認し、半期に一度、学科として目標としている学修成果が得られているか点検し、専門英語教育会議においてこれを検証する。必要に応じて、今後の改善計画を提案する。また、教員個人は、授業アンケートの定期的なフィードバックにより、学生の理解度を確認しつつ自らの講義内容、講義方法、課題の与え方等の改善を図る。必要に応じて、教育能力開発センターより指導、助言を受ける。さらに、学科として英語によるステップアップ教育が到達目標に達しているか、成果及び実施プロセスを検証し、専門英語教育会議で共有しながら改善に向けた意見交換をFDとして実施する。これらの取り組みにより、英語ステップアップ教育の質と改善の仕組みが担保される。

(図4) 英語ステップアップ教育



なお、英語教育に関する教科別の教育内容、教育方法、達成目標は以下の通りである。

【外国語教育科目「総合英語」「発信英語」】

(表5) 外国語教育科目「総合英語」「発信英語」

科目	年次	教育方法
総合英語Ⅰ,Ⅱ	1年次	reading, writing に関わる基礎力を身につけ、基礎的なコミュニケーション能力を養成
発信英語Ⅰ,Ⅱ	1年次	listening, speaking に関わる基礎力を身につけ、基礎的なコミュニケーション能力を養成
総合英語Ⅲ,Ⅳ	2年次	reading, writing に焦点をあて、基礎的な英語力を定着させ、専門分野の英語への橋渡しをする

達成目標：reading, writing, speaking, listening に関する基礎的な英語力を養い、専門分野における英語でのコミュニケーションの基盤を身につける。

方法：小クラスに分け英語専任教員が各クラスを担当し、上述の通りアクティブ・ラーニング形式を用いたステップアップ教育を行う。

【外国語教育科目「専門英語」】

(表6) 外国語教育科目「専門英語」

科目	年次	教育方法
専門英語ⅠA	3年次	一般的な英語力で理解出来るニュースや雑誌の読解や動画の視聴を通して、reading, listening 能力を磨く。また、これらのテーマについて、発表・議論する
専門英語ⅠB	3年次	専門分野の発展の鍵となった原著論文等について、発表・議論する。
専門英語ⅡA	3年次	専門分野に関する解説記事及び総説論文等について、発表・議論する。
専門英語ⅡB	3年次	専門分野に関する最新の原著論文について、発表・議論する。

達成目標：専門分野に関する英語の記事、総説、原著論文に関して、英語での受け答えができるようになる。

【プレゼミナールでの英語教育】

プレゼミナールでの英語教育は、専門英語終了後に4年次から開始する。各9講座からなる3分野のゼミナールで、学生は配属後、指導教員のもと分野に関連する原著論文の輪読等に参加し、原著論文の読解等、円滑に卒業論文の作成に取り掛かることのできる英語力を身につける。

【アドバンスト科目での英語教育】

アドバンスト科目においては、ステップアップ教育の最終ステップとして、これまでに達成された水準を基盤として、実際の専門教育科目であるライフサイエンス科目、国際獣医事科目、臨床獣医科目に配置された授業科目において一部英語で行うこととしている。

3分野の英語の到達目標及び水準は異なっているため、各授業科目においては分野ごとの目標に基づき、授業科目における英語の達成目標を定めている。

1) ライフサイエンス科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

ライフサイエンス研究の実施には、英語によるコミュニケーションが必須であり、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的な英語力、専門分野を英語で説明できる英語力を獲得する必要がある。このためアドバンスト科目（ライフサイエンス科目）9科目のうち8科目を、1回の講義の前半は日本語で説明、後半は英語で説明、最終的に英語でディスカッションを行うなどの方法で教育を行う。

2) 国際獣医事科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

公共獣医事分野では、国際獣医事情、法規等に精通して、これらを日本語、英語の両言語で理解し説明できる能力を養う必要がある。このため、アドバンスト科目（国際獣医事科目）においては、15科目のうち11科目を、専門用語の解説を日本語で行った後、これらの英語表現を学んだうえで英語による事例等の研究を行い、英語を用いた発表を行う等の方法により、実践的な英語の運用能力を養う。

3) 臨床獣医科目における英語の到達目標及び教育方法の特色

医獣連携獣医分野においては、多様化するクライアントとも円滑なコミュニケーションがとれるよう、必要な英語能力（身体、症状、医療行為に関する英語表現等）を身に付ける必要がある。このため、アドバンスト科目（臨床獣医科目）においては、10科目中4科目をアクティブ・ラーニングを取り入れながら実践的な英語教育を行う。

アドバンスト科目の英語教育に関する教育方法は、**（表7）**のとおり3つのカテゴリに分ける。各分野の目標を達成するため、これらの教育方法を効果的に組み合わせて実施する。具体的な各教科の教育方法は**（表8）**のとおりである。

(表7) アドバンスト科目 英語教育方法カテゴリー表

	教育方法
カテゴリーA	<ul style="list-style-type: none"> ・主な内容は英語で説明し、日本語で補足する方式で授業を行う。ディスカッションあるいはプレゼンテーションなどは、主に英語を用いて行う。 ・本カテゴリーで行う科目については、専門英語科目や研究室配属での英語文献の抄読等の延長線上にある。これまで学修してきた英単語を用いた授業になることから、英語を主体とした授業形態を取り、英語での理解を深めることを目的とする。
カテゴリーB	<ul style="list-style-type: none"> ・英語と日本語で併記したスライドを用い、日本語と英語の両言語での理解を促す。専門用語については、日本語で解説した後、これに対応する英語表現を学ぶ（あるいはその逆順で講義する）。また、実際の事例を用いて学修する。プレゼンテーションは主に英語を用いて行う。 ・本カテゴリーで行う科目については、日本語独特の専門用語が用いられていることが多く、英語の用語を日本語（訳語）に置きかえることが容易ではない。そのため授業内容を英語で理解することが比較的難しいことから、専門用語の英語表現について学修する授業方法を採用し、国際通用性を高めることを目的とする。
カテゴリーC	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブ・ラーニングを取り入れ、実用的な英語のリスニング、スピーキング能力を養う。また、ディスカッションあるいはプレゼンテーションは、主に英語を用いて行う。 ・専門用語はしばしば英語が用いられているが、臨床現場においては、一般の人に対して専門的内容を説明することが求められる。 ・本カテゴリーで行う科目については、アクティブ・ラーニングを取り入れ、専門的な内容を一般的な単語で伝達できる能力を養うことを目的とする。

(表8) アドバンスト科目（一部英語科目） 教育方法

分野	英語教育の到達目標	一部英語で行うアドバンスト科目	教育方法
ライフサイエンス分野	ライフサイエンス研究に必要な、リスニング、プレゼンテーション、ディスカッション等で用いる実践的英語力を獲得し、専門分野に関し英語で説明ができる。	分子細胞腫瘍学 発生工学 獣医病態モデル学 創薬科学 トランスレーショナル・リサーチ 比較動物機能科学 修復・再生医療科学 国際ライフサイエンス産業政策論	カテゴリーAの方法を中心とし、科目によってはBとの組み合わせで講義を行う。
公共獣医事分野	公共獣医事に関する専門用語を日本語、英語の両言語で理解し、国際獣医事情、法規等が理解・説明できる。	国際獣医事概論 国際動物関連法規 レギュラトリー科学 国際動物疾病学 国際野生動物管理学 産業動物疾病診断病理学 セキュリティー学 グローバル食品管理科学 国際獣医法医学 動物危機管理学 国際生物資源学	カテゴリーBの方法を中心として講義を行う。科目によってはAの方法を組み合わせで講義を行う。
獣医連携獣医分野	獣医療コミュニケーションに必要な能力、例えば身体に関する英語表現、症状や痛みに関する英語表現、医療行為に関する英語表現等を身につけ、クライアントからの聞き取り、医療行為の説明、検査結果の説明、処方と管理等について一般用語で説明できる。	分子疫学 獣医臨床疫学演習 国際展示動物疾病学 トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン	カテゴリーCの方法を中心とし、科目によっては、AあるいはBとの組み合わせで講義を行う。

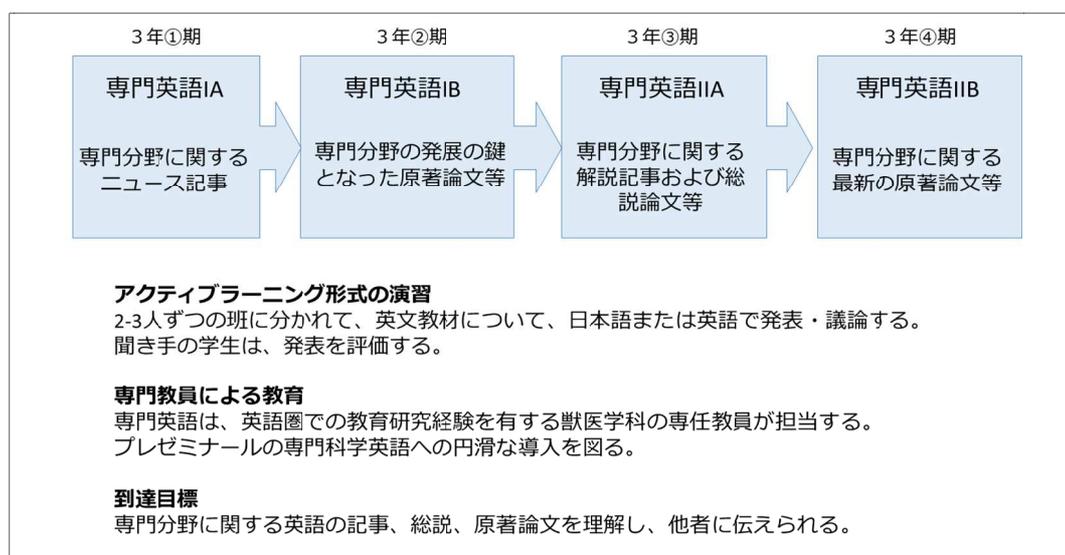
(2) 特色②： 海外経験を有する教員を配置すること

専門教育科目における英語教育では、海外での教育研究経験を持つ獣医学科の専任教員が、自身の海外活動経験に基づき選んだ獣医学関連記事、評論、論文などを実践的な課題として用いる（資料 30）。海外の教育・研究指導経験を持つ教員が担当する教育によって実践的な英語力を身につける。

(3) 特色③： 分野別に実施する実践的な英語の活用能力の醸成

学生は「総合英語」「発信英語」等のステップを終了した後、「専門英語」、プレゼミナールを経て、分野別に「アドバンスト科目における英語教育」、そして「卒業論文における英語教育」へとステップアップする。これら3つのステップでは、より実践的な英語力を醸成する特色ある教育プログラムが組み立てられている。

(図5) アドバンスト科目につながる専門英語ステップアップ教育（3年次）



特に、「専門英語 I A」「専門英語 I B」「専門英語 II A」「専門英語 II B」においては、アクティブ・ラーニングを取り入れ、受け身型の英語学習から実践英語力の強化への橋渡しを行う。学生は、2～3人のグループ単位で課題を「批評的に」読み、グループ内にて「建設的な」議論を行い、それを演習時間に発表し議論することを要求される。この過程を通して外国語を用いてコミュニケーションをとることができる基盤となる能力を身につけることができる。

語彙力・読解力の強化を促すために、課題は一般的な英語力で理解出来るニュースや雑誌の読解から始まり、専門の原著論文が読めるレベルまで徐々にステップアップ出来るように考慮している。この科目は、学生間の議論を促進するために発表・討論は日本語で始めるが、授業の進行や学生の議論力の進歩に応じて順次英語での議論に切り替える。

このような英語力を備えた上で、アドバンスト科目に臨むことで、英語で専門分野を理解し、問題解決能力を高めるような体制を整えている。さらに、アドバンスト科目では、日本語と英語を交えた講義を行い、実習科目ではその成果を英語で発表することにより、両言語での理解力を養い、外国語を用いてコミュニケーションを図ることができる、というディプロマポリシーを実現する。

4. 教養教育科目について

中央教育審議会答申に示されたように、10代後半から20代前半にかけては、社会の中で自己の役割や在り方を認識し、より高いものを目指すことを意識した知的訓練を行うことが重要であり、大学の教養教育はこうした知的訓練の中核を占めるものと考えられる。このため、人文・社会科学及び健康・スポーツに関する科目からなる〈人間・社会科学教育科目〉と、インターンシップやプレゼンテーション、文章表現等の社会人基礎力を養う〈キャリア教育科目〉、自然科学の視野を広げるための〈科学技術教育科目〉の3科目群を置き、横断的な教養教育科目の履修を可能にしている。

これら教養教育科目を通じて幅広い教養の修得をはかる。教養教育科目については、教育課程上その多くを1～2年次に配置しているが、在学期間の中で、学生の知的好奇心に応じて自由に履修されるべきものと考えている。

5. 準正課教育プログラムの設定

大学生生活全般を通じての全人的な成長を促すために、自主性、創造性、協調性、リーダーシップの醸成を重視する。このため、授業や卒業研究といった単位認定を伴う「正課教育」、部活動やサークル活動といった学生の自発的活動である「正課外活動」以外に、本学部では、第3のカテゴリーとして、単位認定を伴わない「準正課教育プログラム」を提供する。

本プログラムは、学生が自発的な意志で参加・企画することを基本としたもので、正課教育におけるアクティブ・ラーニングに比べて学生の主体性のウェイトがより大きい。大学内に準正課教育プログラム運営委員会を設置し、適正に行われているか、期待される成果が得られているかどうかを検証し、指導する。

計画しているプログラム（CBT教材作成プログラム、ラボ探訪プログラム、地域コミュニティー交流プログラム）の内容を（資料43）に示す。なお、これらの活動は授業のない空き時間を利用する。

V. 教員組織の編制の考え方及び特色

1. 教員組織編制の基本的な考え方

本学部の教育研究上の目的、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー等、各種方針に沿い、教育研究の質を保証する教育研究体制を整備する。

獣医学科は、新たな分野で活躍する人材を養成するため、高度な専門性を有する教員や実務経験を有する教員等、多彩な教員構成とする。獣医保健看護学科は、獣医関連業務の専門性を有する教員や公共獣医事等、実務経験を重視した教員構成とする。

2. 教員組織編制の考え方に基づく教員配置

本学部の専任教員数は、獣医学科 75 名（大学設置基準 20 名）、獣医保健看護学科 12 名（大学設置基準 8 名）、計 87 名からなり、大学設置基準を満たす教員数となっている。本学部の特色を発揮させるため、獣医学をはじめ医学、薬学、農学、理学分野等で活躍している教育研究者及び行政分野や臨床分野で活躍している実務経験者を配置した。

実習担当教員の年間スケジュールは別紙（獣医学科：資料 38、獣医保健看護学科：資料 42）のとおりであり、授業を進めていく上で支障のない教員配置となっている。また教員編制表を（資料 44）に示す。

（1）獣医学科

本学科の専任教員 75 名の教員職位ごとの内訳は、教授 29 名、准教授 15 名、講師 7 名、助教 24 名である。本学科は獣医師国家試験受験資格を取得するため、コア・カリキュラムに対応する全ての科目を必修とし、専任教員（「馬臨床学」を除く）を置いている。なお、75 名の専任教員を配置したことにより 獣医学科の全科目の専任比率は 88%であり、コア・カリキュラムに対応した科目に限ると専任比率は 95.8%であった。特にコア・カリキュラムに対応する科目については大学が自身の責任において完結させることが求められており、この様な高い専任比率は本学の特徴である。

本学科の「専門教育科目」における教員配置は次のとおりである。

<学部共通導入科目> 4 科目の全科目

専任教員 18 名（教授 13 名、准教授 5 名）

<基礎科目> 10 科目中 8 科目

専任教員 19 名（教授 7 名、准教授 4 名、講師 1 名、助教 7 名）

<基礎獣医系科目> 11 科目の全科目

専任教員 22 名（教授 7 名、准教授 7 名、講師 2 名、助教 6 名）

<応用生物系科目> 18 科目の全科目

専任教員 31 名（教授 15 名、准教授 6 名、講師 1 名、助教 9 名）

<公衆衛生系科目> 9 科目の全科目

専任教員 16 名（教授 7 名、准教授 5 名、助教 4 名）

<畜水産系科目> 7科目中 5科目

専任教員 11名 (教授 6名、准教授 2名、助教 3名)

<臨床系科目> 33科目中 31科目

専任教員 36名 (教授 14名、准教授 5名、講師 4名、助教 13名)

<アドバンスト科目>

「獣医キャリアスキルアップ研修」：専任教員 3名 (教員数：教授 3名)

<ライフサイエンス科目> 9科目の全科目

専任教員 21名 (教員数：教授 9名、准教授 7名、講師 2名、助教 3名)

<国際獣医事科目> 15科目中 14科目

専任教員 16名 (教員数：教授 10名、准教授 4名、講師 2名)

<臨床獣医科目> 10科目の全科目

専任教員 22名 (教員数：教授 10名、准教授 5名、講師 3名、助教 4名)

<総合科目 (卒業論文Ⅰ～Ⅲ)> 専任教員 47名 (教授 28名、准教授 15名、講師 4名)

なお、「外国語教育科目」には教員 12名 (教授 3名、准教授 3名、講師 2名、助教 4名) を配置する。

特に、本学科の特色である<アドバンスト科目>において、実務経験を有する多彩な専任教員を配置することにより、充実した教育を行う。

ライフサイエンス分野には、製薬企業等、創薬開発の経歴、医学系研究所等、先端ライフサイエンス研究に関わる経歴を有する者を配置している。また、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野においても、各分野の実務経験を重視して配置する。特に医獣連携獣医分野は、医療系分野における学歴、職歴並びに実務経験を有する教員を配置する。これにより医獣連携獣医分野として、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師を養成する。医獣連携獣医分野においても、各分野の実務経験を重視して配置することで、実践的な教育研究を行う。さらに、3分野において国際対応のできる獣医師を養成するため、外国大学における学歴、研究者としての外国の大学や研究機関への留学歴を有する教員を配置している (資料 30)。

本学科専任教員 75名のうち、獣医師免許保有者は 57名である。学位取得者は、博士 67名 (獣医学 33名、農学 16名、医学 10名、理学 2名、薬学 1名、学術 1名、カナダ Doctor of Philosophy 1名、水産科学 1名、工学 1名、文学 1名)、修士 5名、学士 3名である。

(2) 獣医保健看護学科

獣医保健看護学科の専任教員は 12名である。教員の職位の内訳は、教授 4名、准教授 5名、講師 2名、助教 1名である。「専門教育科目」 9名、「教養教育科目」 3名を置いている。

本学科の「専門教育科目」において、＜学部共通導入科目＞及び＜獣医看護基礎科目＞は、獣医師と協働するVPPを養成するために基礎的な獣医学を身につける科目であり、獣医学科の教員が兼担となっている。基礎獣医学をベースとして獣医看護の基礎並びに専門知識を学ぶ＜獣医看護専門科目＞＜獣医看護アドバンスト科目＞は、本学科の主要科目であり、獣医保健看護学科の専任教員が担当することとしている。具体的な、教員配置は、次のとおりである。

- ＜学部共通導入科目＞4科目のうち2科目
専任教員2名（教授1名、准教授1名）
- ＜獣医看護基礎科目＞28科目のうち7科目
専任教員6名（教授2名、准教授3名、助教1名）
- ＜獣医看護専門科目＞25科目のうち18科目
専任教員8名（教授3名、准教授4名、助教1名）
- ＜獣医看護アドバンスト科目＞
 - ＜実験動物科目＞8科目のうち6科目
専任教員5名（教授1名、准教授3名、助教1名）
 - ＜公衆衛生科目＞11科目のうち6科目
専任教員3名（教授1名、准教授1名、助教1名）
 - ＜高度獣医療看護科目＞6科目のうち4科目
専任教員4名（教授2名、准教授2名）
 - 「獣医看護実務実習」専任教員3名（教授2名、准教授1名）
- ＜総合科目＞10科目の全科目
専任教員8名（教授4名、准教授4名）

なお、「教養教育科目」には教員3名（准教授1名、講師2名）を配置する。

本学科の専門教育科目担当の専任教員は、これまでに大学において獣医臨床及び獣医看護教育研究に従事してきた研究者教員と実務経験を持つ教員を配置する。実務経験を持つ教員は、ライフサイエンス分野に4名、公共獣医事分野（産業動物・公務員）に2名、及び獣医療看護分野に3名である。

専任教員12名のうち、獣医師免許保有者は6名、学位保有状況は博士8名（獣医学3名、農学3名、医学1名、健康科学1名）、修士3名、学士1名である。

（3）獣医学教育病院

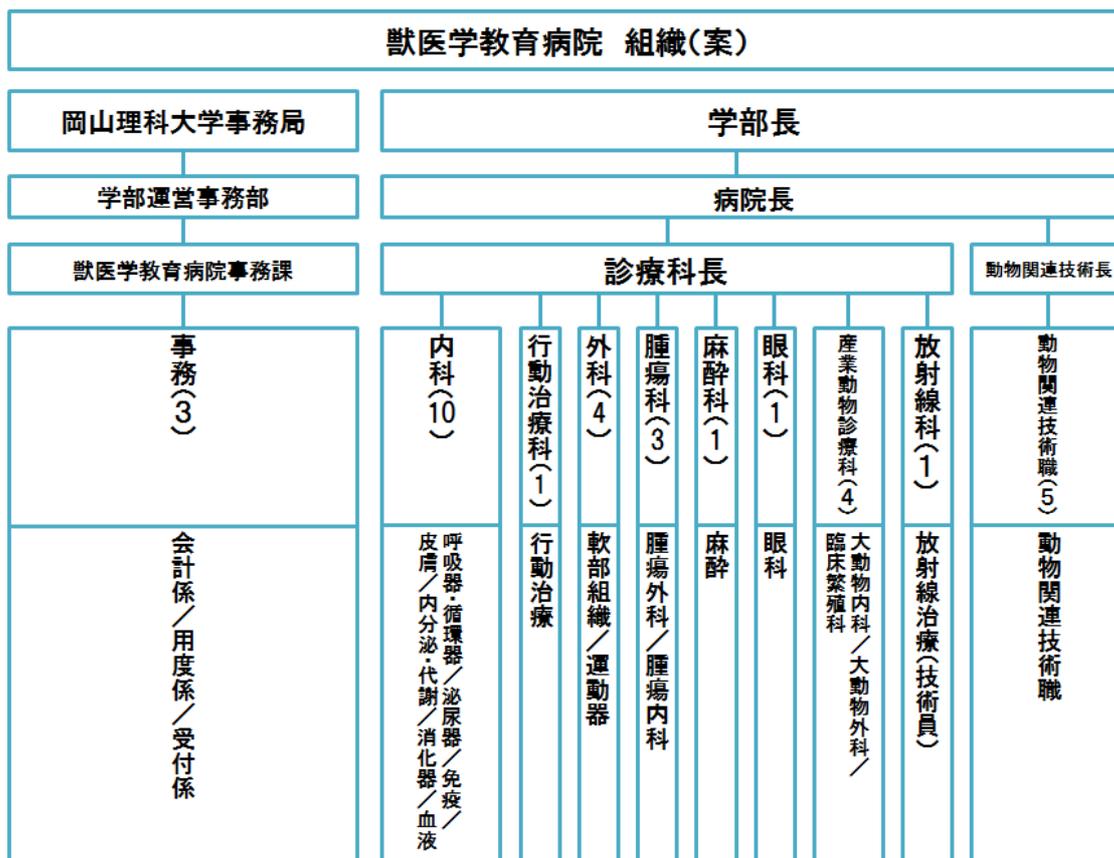
獣医学教育病院の管理運営体制は、学部長を組織長とし、病院長、診療科長、動物関連技術長（獣医看護師長）及び獣医学教育病院事務課長の役職を設け、獣医学教育病院組織（案）とする（**図6**）。獣医学教育病院の診療科及び配置人数は、内科10名、行動治療科1名、外科4名、腫瘍科3名、麻酔科1名、眼科1名、産業動物診療科4名、放射線科1名の25名で、獣医学部の専任教員が診療を担当するが、これに加えて、放射線科の1名は

獣医学教育病院の専任技術員が担当する。動物関連技術職（獣医看護師等）については、当初5名での診療補助体制とし、5名の内訳は、専任3名、兼任2名である。

獣医学教育病院における会計、用度、受付等の事務業務は、獣医学教育病院事務課が行い、専任3名を配置する。

また、放射線治療室（リニアック）の管理体制として、専任教員のうち、第一種放射線取扱主任者の有資格者2名を配置する。

（図6）獣医学教育病院組織（案）



3. 研究体制

本学部の研究体制は、先進性を重視し、従来の講座別研究室体制をとらず、学科を越えて3つの研究グループを構築する。3つの研究グループは、ライフサイエンス研究グループ、公共獣医事研究グループ、医獣連携獣医研究グループからなる。それぞれの研究グループは、獣医学をはじめ、医学、薬学、農学、理学分野等、多様な領域で活躍している教員で構成されており、異なる領域の研究者間の交流を通じ研究を活性化し新たな発想を生み出す体制となっている。実際の研究は前述（I-4. 獣医学部の中心的な学問分野とその研究対象）の通り、目的別プロジェクト型研究というスタイルでさらに分化したチーム構成により実施される。したがって、これらの研究を推進できる研究業績及び資質を

備えた教員を採用するため、現時点で当該研究分野の発展に寄与する研究に取り組んでいることを観点として選考した（資料 39）。

さらに、上記の研究活動を活性化するために、先端ライフサイエンス研究を行っている京都大学 iPS 細胞研究所などで導入されているオープンラボを取り入れる。オープンラボは、各分野の教員が同じフロアで実験を行うことにより、教員は必然的に研究内容の情報交換を行うこととなり、多様な観点から示唆を得る場、また、研究グループとして新たな発想を生み出す場として活用することとなる。実験動物センター、国際獣医教育研究センター、獣医学教育病院等においても、両学科で自由にアクセスし、使用できる体制を整えている。

4. 教員の年齢構成

獣医学科が完成年度を迎える平成 35（2023）年度には、70 代 12 名、60 代 13 名、50 代 10 名、40 代 26 名、30 代 14 名の年齢構成となる。また、獣医保健看護学科が完成年度を迎える平成 33（2021）年度には、70 代 3 名、60 代 1 名、50 代 3 名、40 代 5 名の年齢構成となる。

両学科ともに教育研究において豊富な経験と実績を有する教授、准教授、講師、及び学生実習等を担当する助教をバランス良く配置することで、教育研究の継続性を担保する。

現行の定年退職年齢（就業規則 第 58 条 第 2 項）は教授 65 歳であり、獣医学科就任予定教員 19 名、獣医保健看護学科就任予定教員 3 名が、就任時または就任後に定年退職年齢に達する。このため「学校法人加計学園就業規則 第 58 条 第 3 項（資料 12）」を適用して、完成年度までの定年退職を延長することが、平成 28(2016)年度第 14 回理事会（平成 29(2017)年 3 月 13 日開催）、平成 29(2017)年度第 6 回理事会（平成 29(2017)年 6 月 20 日開催）及び平成 29（2017）年度第 10 回理事会（平成 29（2017）年 9 月 19 日開催）において承認されている。

これら教員の後任人事は、教育研究の質保証を原則とし、完成年度の前年度から採用手続きを開始する（資料 13）。退職者の教育研究分野の継続性を重視し、教員採用計画に基づき、公募を原則とした公平性、透明性を担保した手続きを行う。早期に取り組むことにより十分な選考を行い、教育研究の質を維持する。

5. 臨床系教員の年齢構成

開設時：獣医学科の開設時（平成 30 年 4 月）の臨床系教員の年齢構成は、20 代 1 名（4%）、30 代 13 名（52%）、40 代 5 名（20%）、50 代 3 名（12%）、65 歳以上 3 名（12%）である。この年齢構成は、完成年度（平成 36 年 4 月）には 20 代 0 名（0%）、30 代 6 名（24%）、40 代 11 名（44%）、50 代 2 名（8%）、60～64 歳 3 名（12%）、65 歳以上 3 名（12%）となる。完成年度に 65 歳以上の教員は、当該年度で退職する予定である（資料 45）。開設時

の年齢構成は、私大教員全体や理工系他複数学部と比較して、30代の教員が多く、40代と65歳以上はほとんど差がなく、50代と60～64は少ない傾向にある。

完成年次：6年後の完成年度になると、教育と研究に関する活性度の高い40代の教員が増えて最も多くなり、50代、60前半と徐々に減少する。65歳以上の教員はこの年度に退職予定であり、これを除くと40歳代をピークとして徐々に減少する整った年齢構成となる。

6. 助手の配置計画

獣医学科に配置する3名の助手（病院獣医師）は、総合参加型臨床実習の指導資格を有する臨床経験3年以上の獣医師を採用する。助手2名は内科のローテーションに、1名は外科のローテーションに組み入れ、教員の管理下で総合参加型臨床実習の学生指導の補助を担当することとしている。また3名の助手は、小動物内科学実習、小動物外科学実習において、教員の指導の下で実習補助することとしている。

VI. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1. 教育方法

獣医学部の授業方法は、講義・演習・実習と、これらの組み合わせからなり、体験に基づく学修を重視し、実習科目とともに学外見学を積極的に取り入れ、能動的な学びが成立するよう配慮している。

①オムニバス形式の教育方法

本学部では、学生が多様な視点から物事を考察することを目的とした授業科目において、オムニバス方式を導入している。オムニバス形式の科目責任者はシラバスに記載した授業目的、達成目標、授業内容や準備学習の指示等を担当者間で確認し、定期試験の後、学生の学修成果の到達度を検証し、評価・改善を行い、教育の質を向上させる体制をとり、教育の一貫性を担保する。

②英語を用いた授業の教育方法

獣医学科ではライフサイエンス科目、国際獣医事科目及び臨床獣医科目において、英語を交えた講義を実施する。具体的にはテーマ毎に日本語の講義の後、語彙の解説を日本語と英語で行い、最後の回に英語での意見交換等を行うなどの方法で専門分野の英語での理解を促進する。

特に、「専門英語ⅠA」「専門英語ⅠB」「専門英語ⅡA」「専門英語ⅡB」では受け身型の英語学習から実践英語力の強化を目的として、アクティブ・ラーニングを取り入れる。海外での教育研究経験を持つ専任教員が、自身の海外活動経験に基づき選んだ獣医学関連記事、評論、論文などを実践的な課題として、グループ内での議論、発表を通して将来国際舞台において獣医学関連の問題を解決する能力を身につける。1年次からの能動的な教育の一般英語から専門英語科目を経ることにより、ゼミ配属後の原著論文の読解、プレゼンテーションなどが円滑に行えるとともに、卒業研究を通じたトレーニング期間にコミュニケーション力をさらに向上させることが期待できる。

さらに、ゼミでの卒業研究を始めるための準備段階として、学生はプレゼミナールとして研究室に所属する。プレゼミナールでは、獣医学に関する国際情報や原著論文を読解し、疑問点や分野における未解明の問題点を見出し、自らの疑問点を教員と協議することで卒業研究テーマを決定することを目標とする。さらに担当教員の指導のもとで卒業研究テーマの研究計画を英語で作成する。

また、このような英語力を養った上で、アドバンスト科目では、日本語と英語を交えた講義を行う。これにより両言語での理解力を養い、外国語を用いてコミュニケーションを図ることができる学生を育てる体制とする。

③獣医師国家試験へ対応する教育方法、履修指導

③-1 共用試験及び国家試験等をサポートする教育

4年次終了時に実施する共用試験(CBTとOSCE)に関しては、「総合獣医学演習Ⅰ」(4年④期)で対応する。「総合獣医学演習Ⅰ」の第4回、第5回及び第8回の授業において、

OSCE の医療面接試験を想定した医療面接実習を行う。また、国家試験に関しては、6年③期に配置する「総合獣医学演習Ⅱ」において、これまでに学習した各領域の総括を行うこととしている。各回の授業においては、基本的な知識の確認の後、国家試験を意識した演習問題に取り組む。

上記の演習科目に加え、学生全体の到達度を見計らいながら、各種の補習講義も行う予定である。学習到達度の未熟な学生に対しては、科目責任者よりチューターに連絡し、受講を促す体制とする。

③-2 共用試験及び国家試験等をサポートする支援システム

獣医学部棟3階に設置するスキルラボには、獣医療で使われる機器・機材（シミュレーション模型を含む）を常設展示し、学生が自由に手を触れ、模擬練習することによって自主的に授業内容を復習することが可能となる。

導入を予定しているeラーニングシステム（EduTrack）には、様々なビデオコンテンツを搭載し（VPCamp*・Ve4u**）、オンデマンドで自宅からでも閲覧できる環境を整備する。現在、文科省教育支援事業によって獣医療面接に関わるビデオが複数作られているが、これらのコンテンツも搭載する。

④講座制導入によるアドバンスト科目の教育方法及び履修指導

獣医学科においては、教育の継続性を重視するため、講座制を導入している。各講座は基本的には、教授、准教授、助教の3人で構成する。これにより、各職位の教員が講座内の役割を認識した上で、学生の教育に責任を持つ体制を整備すると同時に、各講座が担当する教育科目を継続、発展させる仕組みになっている。

養成する人材像の実現に向けて、入学から卒業まで着実に知識、技能を積み上げていくことを重視する。このため、学生の修学状況、学業成績や生活の状況並びに希望する進路に関して、情報を共有し教育に責任を持つ体制をとる。したがって、1年次から3年次までは学年チューターが責任を持つが、4年次以降はゼミに所属することになるため、講座に教育支援、学生支援機能を持たせる必要があり、各講座には教育の継続性のメリットを重視し、講座制を導入する。

⑤体験に基づく学修の重視による能動的な学びの推進

1) 「能動的な学び」の目的及び内容

本学科においては、体験に基づく学びと講義、演習科目を有機的に組み合わせ、知識と経験の往還により獣医師としての実践的な能力を養うことを目標としている。体験的な学びとして実施する学外実習においては、実習は小グループに分け、グループごとに専任教員を配置し個別に実習指導を行うこととしている。実習方法については、以下のとおりであるが、いずれも各グループに専任教員を配置し、各々の役割を明確にしたうえで、実習を行う体制である。

本学科における能動的な学びとは、前述の実習科目の他、講義、演習並びに授業外の学習を通して、学生の学ぶ意欲を引き出し、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究

し、成果等を表現するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力を身に付ける一連の活動と定義する。学生は、6年間にわたり、自ら課題を見つけ解決していくプロセスを通して生涯にわたり獣医師として研鑽し新たな課題に対応していくための向上心と問題解決能力を涵養する。

2) 授業を担当する教員の教育実績

これらの能動的な学びを実践する専任教員についての教育実績は**(資料 37)**のとおりであり、臨床系の教員についても十分な教育経験及び業績があることを確認している。また、講義資料は事前にホームページ等に掲載して学生に予習を促し、その課題について講義・演習においてディベートを行うなどの対話型授業や、講義の後に意見をまとめ次の課題への指示を出す等の工夫を凝らす。

3) 「能動的な学び」を促す授業方法の工夫

本学科は140名という規模の学科であることを勘案し、その規模において学生の能動的な学びが実現するよう、授業内の学習と授業外学習との有機的な関連付けが可能となる環境整備を行っている。

a. eラーニングシステム

国際獣医教育研究センターでは獣医事に関する専門性の高い情報として感染症情報等を収集する。このセンターに専任教員の教育コンテンツ、VPCamp*・Vet4u**等のデータを登録することで、学生は授業外において随時、課題に対する情報を収集し、仮説を立て、考察する活動を行うことが可能となる。講義科目、演習科目及び実習科目を通じて得られた知識、経験をさらに授業外におけるコンテンツを利用して、学生の能動的な学びが完結するよう、環境を整備している(eラーニングシステム EduTrack)。

(*VPCamp: 文部科学省 大学における公共獣医事教育推進委託事業「分野1 公衆衛生行政等における全国の実習システムの構築」東京大学が幹事校となっている)。

(**Vet4u: 大学間連携共同教育推進事業「グローバル社会を担う次世代型獣医学系大学教育機構の構築」東京大学が幹事校となっている)

b. スキルラボ

獣医学部棟3階に設置するスキルラボには、獣医療で使われる機器・機材(シミュレーション模型を含む)を常設展示し、学生が自由に手を触れ、模擬練習することによって自主的に授業内容を復習することが可能となる。

c. CBTシステムの学生への開放

導入を予定しているCBT-Medicalは、CBTの作問・試験実施・結果分析システムである。このシステムは、基本的には各教員が各講義や演習、さらに試験等で利用するものであるが、教員とは別に学生管理の回路をもうけ、これを学生に開放し自主的に運用させる予定である。学生は準正課教育プログラムの一環として勉強会を発足させ、作問・試験実施・結果分析の作業を行う。学生にとっては普段は受け身である試験に

関して、能動的な立場（教師の立場）となるこの試みは、アクティブ・ラーニングの一環としても極めて有意義なものと考えている。

4) 教育能力開発センターの役割

予習・復習などの授業外学習を促す授業形態を学部全体として推進するため、獣医学部には教育能力開発センターを配置し、FD 担当教員を置く。教育能力開発センターは、教育担当副学部長を責任者として、獣医学部の専任教員で構成する（資料 35）。教育能力開発センターを核として、能動的な学びに関する計画立案と推進、効果の検証、自己点検評価や改善計画の立案を行うこととして、教育の PDCA サイクルを機能させる。さらに授業アンケート結果や学生の学修成果等のエビデンスに基づいて、適宜、FD 担当教員から授業改善の助言、授業法の指導を受ける体制とする。また、学部、学科単位において FD 研修を行い、教育方法の改善や学部教育の質向上に向けた取り組みを行う。

2. 履修支援の体制

本学では、『学生便覧』、『教育の目標と方針』と『履修ガイド』を学生に配付し、全学・各学部・各学科の教育目標・方針を明示するとともに、これらに基づいてチューターを中心とした教員が履修指導を実施する。学生の希望進路・適性、興味・関心等に応じて履修モデルを示し、計画的な学修の支援を行う。

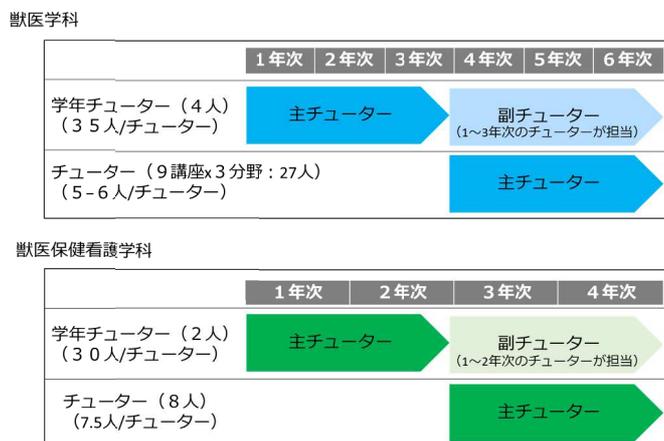
3. 履修指導

学生が授業の内容を事前に理解した上で、適切な履修プランを立てることができるよう、すべての授業は、①授業科目の目的、②概要、③授業計画、④テキスト・参考資料、⑤成績評価基準等を記載したシラバスを、履修登録開始前に Web 上で公開する。これに加えて、春学期及び秋学期の授業の開始時期（4 月、9 月）には全学生を対象としたオリエンテーションを開催し、当該学年、または当該学期における履修上の注意を周知する。

入学直後のオリエンテーション時に、学部学科の教育目的、教育研究の特色、講座配属方針や進路等について具体的な説明を行う。入学時から卒業時まで、学生の修学、学生生活の指導を行い、必要に応じて個人的な相談助言を行うため、チューター制（担任制）を採用している。獣医学科では、1 年次から 3 年次までは主チューターのための体制とし、各学年 4 人（35 人に 1 名）配置する。4 年次に講座に配属された後は、主チューターと副チューターの 2 名体制として、講座責任者（9 講座×3 分野=27 人：5.2 人に 1 名）が主チューターとなる。1 年次から担当している学年チューターも副チューターとして、6 年次までサポートする体制をとる。これにより、1 年次から 6 年間継続して学生をサポートするとともに、講座責任者がチューターになることで進路選択等をサポートできる体制となっている。また、副チューターを置き、複数人により学生をサポートする体制を整備することで、学生は、複数人と相談できる体制となっている。獣医保健看護学科も同様に、

1年次～2年次までは各学年2人（30人に1名）配置し、3年次以降は講座責任者が主チューターとなり、1年次から2年次のチューターが副チューターとなる。

（図7）チューター制



チューターは、半年ごとの成績発表時に学生と面談を行い、知識と技術の修得状況を確認し、個々の学生に履修指導を行う。

獣医学部の卒業生の進路は研究職、公共獣医事、実験動物管理、動物看護、大学院進学等の様々な分野にわたる。そのため、初年次から進路に関する適切な情報を学生へ提供する。チューターは個々の学生が将来の進路をふまえ、自立的に履修計画を立案できるように指導を行う。

獣医学科では、3つの分野の選択は4年次の講座配属時に行う。ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、医獣連携獣医分野に各9講座を配置している。

獣医保健看護学科では、3つの分野の選択は3年次のプレゼミナールIにおいて講座配属先を決定する。ライフサイエンス分野、公共獣医事分野、獣医療看護分野に各1講座を配置している。

学生の希望と成績により調整を行い3分野へバランスよく配属する。各分野の専門教員により専門性の高い教育研究を行う。3分野に分かれたのち、獣医キャリアスキルアップ研修において、実習先を選択する際には、講座のチューターが今後のキャリアを見据えて適切に指導を行う体制として、特に医獣連携獣医分野の学生は、医学系、薬学系の研修先を選択するよう促す。

4. 進級要件

(1) 獣医学科

獣医学科の進級要件は、次のとおりである。

4年次から5年次に進級するとき、専門教育科目の「総合獣医学演習Ⅰ」を含む必修科目100単位以上を修得していること。また、外国語教育科目より必修科目6単位、選択必修科目を2単位以上修得していること。

(表9) 獣医学科 5年次進級要件

科目区分		4年次から5年次の進級要件	修得単位数
専門教育科目	学部共通導入科目	「総合獣医学演習Ⅰ」を含む必修科目100単位以上を修得していること	
	基礎科目		
	基礎獣医系科目		
	応用生物系科目		
	公衆衛生系科目		
	畜水産系科目 臨床系科目		
外国語教育科目		必修科目6単位、選択必修科目2単位以上修得していること	

(2) 獣医保健看護学科

獣医保健看護学科の進級要件は、次のとおりである。

3年次から4年次に進級するとき、専門教育科目を60単位以上、そのうち必修科目を40単位以上、外国語教育科目より必修科目6単位、選択必修科目を2単位以上、教養教育科目を16単位以上を含み、合計で96単位以上修得していること。

(表10) 獣医保健看護学科 4年次進級要件

科目区分		3年次から4年次の進級要件	修得単位数
専門教育科目	学部共通導入科目	60単位以上 (そのうち必修科目40単位以上)	96単位以上
	基礎科目		
	獣医看護基礎科目		
	獣医看護専門科目		
外国語教育科目		必修科目6単位、選択必修科目2単位以上	
教養教育科目	初年次教育科目	16単位以上	
	人間・社会科学教育科目		
	キャリア教育科目		
	科学技術教育科目		

5. 卒業要件

(1) 獣医学科

卒業要件は、表 11 の通りとする。

(表 11) 獣医学科卒業要件

科目区分		修得単位数			
専門教育科目	学部共通導入科目		3 単位以上	145 単位以上	
	基礎科目		26 単位以上		
	基礎獣医系科目		48 単位以上		
	応用生物系科目				
	公衆衛生系科目				
	畜水産系科目				
	臨床系科目		47 単位以上		
	アドバンスト 科目	獣医キャリアスキルアップ研修			2 単位
		ライフサイエンス科目			13 単位以上
		国際獣医事科目			
臨床獣医科目					
総合科目		6 単位			
外国語教育科目		10 単位以上			
教養教育科目	初年次教育科目		19 単位以上	【キャリア教育科目】から 4 単位以上 【科学技術教育科目】から 2 単位以上	
	人間・社会科学教育科目				
	キャリア教育科目				
	科学技術教育科目				
合計		182 単位以上			

獣医学科の卒業時までには修得すべき単位数は 182 単位以上である。卒業要件は、「専門教育科目」145 単位以上、「外国語教育科目」10 単位以上及び「教養教育科目」19 単位以上、である。

「専門教育科目」のうち、＜学部共通導入科目＞、＜基礎科目＞、＜基礎獣医系科目＞、＜応用生物系科目＞、＜公衆衛生系科目＞、＜畜水産系科目＞、＜臨床系科目＞については、コア・カリキュラムに対応する科目を必修とし、卒業要件単位数とする。

＜⑧アドバンスト科目＞は、「獣医キャリアスキルアップ研修」と 3 つの科目群＜⑧-A ライフサイエンス科目＞、＜⑧-B 国際獣医事科目＞、＜⑧-C 臨床獣医科目＞を設定し、各分野に分かれて人材を養成する。「獣医キャリアスキルアップ研修」は、実践的な場での体験を行い、卒業後の進路など将来設計に役立てる必修科目である。ライフサイエンス分野においては、研究に必要な基礎的な知識と技能を有し、実験動物の研究成果をヒトの治療に繋ぐトランスレーショナル・リサーチ分野で活躍できる人材を養成する。このため、＜⑧-A ライフサイエンス科目＞には、医療分野全般にわたる国際標準の研究開発のプロセス、ハイスループットスクリーニング等の最新創薬技術、有効性・安全性・品質に関わる諸規制について学ぶ「トランスレーショナル・リサーチ」、「創薬科学」、「国際ライフサイエンス産業政策論」、「ライフサイエンス特別実習」等、9 科目の選択科目を置き、ライフサイエンス分野での実践的な知識を修得する。ライフサイエンス分野を選択した場合には＜⑧-A ライフサイエンス科目＞より 10 単位を必修とし、残りの 3 単位に関しては、＜国際獣医事科目＞＜臨床獣医科目＞から修得する。公共獣医事分野においては、国内外の感染症防御や食の安全性を担うための国際的な視野を有し、家畜越境感染症や人獣共通

感染症の対策、及び危機管理対応に貢献できる人材を養成することを目的としている。このため、＜⑧-B 国際獣医事科目＞には、現場で発生した課題に対して自ら考え、検証し解決にあたることのできる実践的な能力を養うことを重視し、「国際獣医事概論」、「国際動物関連法規」、「セキュリティ学」、「グローバル食品管理科学」、「人獣共通感染症学実習」、「公共獣医事情報解析実習」等、15科目の選択科目を置く。また、教育方法としてPBLを取り入れ、学生の実践的な能力を養う。公共獣医事分野を選択した場合には、＜⑧-B 国際獣医事科目＞から9単位を選択必修とし、残りの4単位に関しては、同科目群あるいは＜ライフサイエンス科目＞＜臨床獣医科目＞から修得する。医獣連携獣医分野においては、加齢性疾患などヒトに類似する環境で自然発症した伴侶動物の疾病構造を解明し、科学的臨床評価に基づき、動物とヒトの間で相互に応用できる予防・診断・治療法の確立等、臨床医学の観点から動物とヒトの健康に貢献できる獣医師を養成する。このため、＜⑧-C 臨床獣医科目＞は、獣医学で得られた基礎的な研究成果をヒト臨床分野に繋いでいく方法論、新しい医療技術・治療薬・診断薬の開発に活かす手法等を学ぶ「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」、「抗菌薬バイオロジー」、「免疫関連疾病学」、「総合臨床検査特別実習」等、10科目の選択科目を配置する。ライフサイエンス研究の基礎に関する知識を養うことから、＜⑧-C 臨床獣医科目＞から9単位を選択必修とし、＜ライフサイエンス科目＞から「トランスレーショナル・リサーチ」、「分子細胞腫瘍学」、「創薬科学」の3科目3単位を必修とする。残りの1単位については、分野を問わず選択する。なお、この分野では、「トランスレーショナル・リサーチ」（5年③期）を履修し一般概念を身に付けた後、より臨床学に特化した「トランスレーショナル・ベテリナリーメディシン」（5年④期）を学ぶことになる。

本学科では養成する人材像に即し、3つの卒業までの履修モデルを設定する（資料14-P1～P3）。

1) ライフサイエンス分野に重点を置く履修モデル

創薬等ライフサイエンス研究で活躍できる人材を養成するために、トランスレーショナル・リサーチ等を重点的に学修する履修モデルとなる。

2) 国際獣医事分野に重点を置く履修モデル

国内外の感染症に係る水際対策、食の安全に対応する公共獣医事を重点的に学修する履修モデルとなる。

3) 医獣連携獣医分野に重点を置く履修モデル

医獣連携獣医師として、伴侶動物の病態解析と治療法の開発について、臨床的な側面と基礎科学的な側面から学修する履修モデルとなる。

(2) 獣医保健看護学科

卒業要件は、表 12 の通りとする。

(表 12) 獣医保健看護学科卒業要件

科目区分		修得単位数		
専門教育科目	学部共通導入科目	3 単位以上	84 単位以上	
	基礎科目	4 単位以上		
	獣医看護基礎科目	18 単位以上		
	獣医看護専門科目	24 単位以上		
	獣医看護アドバンスト科目	実験動物科目		5 単位以上
		公衆衛生科目		
		高度獣医療看護科目		
	獣医看護実務実習	1 単位以上		
総合科目	12 単位以上			
外国語教育科目		10 単位以上		
教養教育科目	初年次教育科目	19 単位以上	【キャリア教育科目】から 4 単位以上 【科学技術教育科目】から 2 単位以上	
	人間・社会科学教育科目			
	キャリア教育科目			
	科学技術教育科目			
合計		124 単位以上		

獣医保健看護学科の卒業時までには修得すべき単位数は 124 単位以上である。これは、「専門教育科目」84 単位以上、「外国語教育科目」10 単位以上及び「教養教育科目」19 単位以上から構成される。

「専門教育科目」のうち、＜学部共通導入科目＞、＜基礎科目＞、＜獣医看護基礎科目＞については、獣医学の基礎知識と技術を学修する科目を必修とし、＜獣医看護専門科目＞については、獣医看護学の専門知識と技術を学修する科目を必修とし、卒業要件単位数とする。

＜獣医看護アドバンスト科目＞は、各分野での専門的知識と技能を学修する獣医看護実務実習を 1 単位以上取得することを卒業要件とする。また、それらの分野別の科目については、選択した分野の科目を 3 単位選択必修とし、合計 5 単位を修得することを卒業要件とする。さらに、VPP としての専門性を高めるために、＜総合科目＞のうちの必修科目 12 単位を卒業要件とする。

本学科では養成する人材像に即し、3つの卒業までの履修モデルを設定する（資料 14-P4～P6）。

1) ライフサイエンス分野に重点を置く履修モデル

ライフサイエンス研究に用いる実験動物の取り扱い技術や看護及び管理等について重点的に修得する履修モデルとなる。

2) 公共獣医事分野に重点を置く履修モデル

産業動物の健康維持、ストレス軽減、感染症の予防など公衆衛生分野及び産業動物看護分野に関連する科目を重点的に学修する履修モデルとなる。

3) 獣医療看護分野に重点を置く履修モデル

獣医看護学に関する専門的な知識と技能を備え、高度専門化する獣医療に対応できる VPP に必要な科目を重点的に学修する履修モデルとなる。

6. 学位論文の単位認定について

(1) 獣医学科

学位論文の作成は、総合的な問題解決能力を醸成する教育として位置づける。「卒業論文Ⅰ」では、学生は研究課題を決めるために、これまでの知識と技術に基づき、教員の指導のもと、必要な背景となる基礎情報を論文や書籍から収集し、研究計画を立案する。「卒業論文Ⅱ」では、自ら選んだ研究課題について、研究目標を達成できるデータの作成、実験データ解析を行う。「卒業論文Ⅲ」では、これまでのデータをまとめ、卒業論文を完成させ、発表する。卒業論文Ⅰ～Ⅲは学修の集大成としての必修科目として位置づけ、これに必要な学修と成果及び時間を考慮し、各2単位、合計6単位とする。

(2) 獣医保健看護学科

学位論文の作成は、総合的な問題解決能力を醸成する教育として位置づける。「卒業研究Ⅰ」では、獣医看護演習で決めた研究課題に関して研究を実施し、教員との意見交換を行い、中間発表を行う。「卒業研究Ⅱ」では、研究結果に基づき、卒業論文を完成し、研究内容について発表する。卒業研究Ⅰ、Ⅱは学修の集大成としての必修科目として位置づけ、これに必要な学修と成果及び時間を考慮し、各4単位、合計8単位とする。

7. GAP 制についての考え方

履修にあたっては、履修科目の登録に年間49単位の上限（CAP制）を設けることにより、授業外での自学自習時間を確保し、計画的に学修に取り組めるようにしている。ただし、本学部では前年度の成績優秀者（30単位以上を取得し、かつGPA（Grade Pointの数値の平均値）3.0以上のもの）に対しては、年間57単位までの登録を認める。

単位修得の認定及び学習の評価は、科目ごとに次の等位（評価基準（表13））に基づいて行う。

（表13）評価基準

評価 評点	S(秀) 100~90点	A(優) 89~80点	B(良) 79~70点	C(可) 69~60点	D(不可) 59~0点	E 受講・受験せず
Grade Point	4	3	2	1	0	0